

史跡 齋宮跡

平成27年度発掘調査概報

2017年3月

齋宮歴史博物館



第186次調査区全景と「さいくわ平安の杜」(北から)



S K 10856・10857 出土状況 (南から)

序

平成 28 年の伊勢志摩サミットの開催に伴い、三重県の歴史・文化は国内のみならず、世界的にも注目されつつあります。先の平成 27 年度は、4 月には明和町で日本遺産「祈る皇女齋王のみやこ 齋宮」に認定され、9 月には平安時代の 3 棟の復元建物を中心とした「さいくう平安の杜」が完成し、齋宮跡全体がサイトミュージアムとして、その魅力を発信しております。

今後、齋宮歴史博物館、いつきのみや歴史体験館と合わせて、齋宮跡を訪れるすべての方に、史跡齋宮跡の歴史と文化を体験、体感していただける場所として、末永く活用していただくことを切に希望します。

さて、今回報告する発掘調査は、史跡の実態を解明するため、下園東区画の北西部で行ったものです。平安時代初頭にさかのぼると考えられる南北の方格地割の道路側溝、文字や記号が刻まれた土器などを確認しました。調査で得られた成果は、地元明和町の皆様をはじめ、ひろく県民の皆様や齋宮跡を訪れる皆様に還元できまじよう、積極的に情報発信してまいります。

史跡齋宮跡の保存および調査研究・整備活用にあたり、貴重なご意見やご指導を頂きました文化庁、齋宮跡調査研究指導委員ほか多くの方々や、発掘調査にあたり様々なご配慮・ご協力を頂きました国史跡齋宮跡協議会をはじめとした地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

最後とはなりましたが、2015 年 10 月 6 日に、齋宮跡調査研究指導委員の八賀晋先生が逝去されました。八賀先生は、古代史を中心として日本考古学界に大きな足跡を残すとともに、齋宮跡の解明についてもご尽力されました。ここに、これまでの感謝とともに、謹んで哀悼の意を表します。

2017（平成 29）年 3 月

齋宮歴史博物館

館長 濱口尚紀

例 言

- 1 本書は、齋宮歴史博物館が平成27年度に国庫補助金を受けて実施した史跡齋宮跡発掘調査（第186次調査）の概要をまとめたものである。
- 2 明和町が調査主体となって実施した、史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第185次調査報告書は、別途明和町が刊行している。
- 3 遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第Ⅵ座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。また、建物の軸方位については、全て北を規準として表記している。
- 4 遺構時期区分の指標となる土器の分類と年代観については、「齋宮跡の土器」（『齋宮跡発掘調査報告Ⅰ』齋宮歴史博物館、2001年）、大川勝宏2010「齋宮跡における平安期貿易陶磁の基礎的研究」『齋宮歴史博物館研究紀要十九』齋宮歴史博物館、大川勝宏2005「平安時代後期の齋宮跡」『明和町史 齋宮編』による。
- 5 齋宮跡の時期区分については土器の編年に基づき、期と段階を用いて「齋宮跡Ⅱ期第1段階」等と表記すべきであるが、本文中ではこれを簡略に「齋宮Ⅱ-1期」等と表現している。
- 6 遺構表示記号は次のとおりである。
SA：柱列・堀 SB：掘立柱建物 SD：溝 SF：道路 SK：土坑 SZ：落ち込み・その他 Pit：柱穴、ピット
- 7 遺物実測図は基本的に実物の4分の1で行っているが、一部の遺物は原寸大で掲載している。遺物写真は縮尺不同である。
- 8 土層および出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行「新版標準土色帖」（2004年度版）に拠る。施釉陶器の色調については一部、大日本インキ化学工業株式会社発行「日本の伝統色」第5版（1989年）を用いて補っている。
- 9 遺物の漢字表現は、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「碗」、「つき」は「杯」を用いる。ただし、参考文献からの引用の場合にはこの限りではない。
- 10 本書の執筆・遺物写真の撮影は、宮原佑治があたり、編集は調査研究課で行った。また発掘調査および資料整理については、大川勝宏・穂積裕昌・伊藤文彦・杉原泰子・八木光代・西川千晶が補佐した。

目次

I 前言	1
II 第186次調査	7

挿図目次

第I-1図 史跡齋宮跡位置図	3
第I-2図 平成27年度発掘調査区位置図	4
第I-3図 齋宮跡方格地割区画名称図	5
第I-4図 史跡齋宮跡における大地区表示図	6
第II-1図 第186次調査 グリッド図	7
第II-2図 第186次調査 調査区位置図	8
第II-3図 第186次調査 遺構平面図	9
第II-4図 第186次調査 土層断面図	10
第II-5図 第186次調査 S D 10852・10854・10859 断面図/ S K 10856・10857・10858 出土状況図・断面図	12
第II-6図 第186次調査 S B 10853 平面図・断面図・出土状況図/ S D 10849・10851 (S F 10850) 断面図	15
第II-7図 第186次調査 S Z 10841 平面図・断面図	16
第II-8図 第186次調査 S Z 10845 平面図・断面図/ S K 10842・10855 出土状況図・断面図	17
第II-9図 第186次調査 出土遺物実測図1	19
第II-10図 第186次調査 出土遺物実測図2	20
第II-11図 第186次調査 出土遺物実測図3	21
第II-12図 第186次調査 出土遺物実測図4	22
第II-13図 第186次調査 出土遺物実測図5	24
第II-14図 下園東区画の調査成果	25

写真図版目次

巻頭図版	第186次調査区全景と「さいくう平安の杜」(北から) / S K 10856・10857 出土状況(南から)	
写真図版1	南調査区東側全景(北から) / 南調査区西側全景(北から)	29
写真図版2	北調査区全景(北から) / S K 10856・10857・10858 出土状況(南から)	30
写真図版3	S K 10856 下層出土状況(南から) / S F 10850 南側(北から)	31
写真図版4	S F 10850 北西側溝群(S D 10831 ほか・北から) / S D 10830(東から) / S Z 10841(南から)	32
写真図版5	S Z 10845(南西から)	33
写真図版6	出土遺物(1)	34
写真図版7	出土遺物(2)	35
写真図版8	出土遺物(3)	36

表目次

第I-1表	平成27年度発掘調査一覧表	2
第II-1表	第186次調査 掘立柱建物一覧表	18
第II-2表	第186次調査 遺構一覧表	18
第II-3表	第186次調査 遺物観察表(1)	26
第II-4表	第186次調査 遺物観察表(2)	27
第II-5表	第186次調査 遺物観察表(3)	28

I 前 言

1 調査の経緯と概要

史跡齋宮跡は、後に齋宮歴史博物館が建設された古里地区での宅地開発計画に伴い昭和45年に発掘調査が始まり、文化庁の補助事業として昭和48年から開始した範囲確認調査を経て、昭和54年3月27日に国史跡に指定された。県は史跡指定に伴い齋宮跡調査事務所を設置して発掘調査に当たり、平成元年度からは10月に開館した齋宮歴史博物館が史跡解明のための計画調査を継続して実施している。

齋宮跡の発掘調査では、史跡西部に所在すると想定される飛鳥・奈良時代の齋宮跡を解明することが課題であるほか、史跡東部に存在した方格地割と平安時代の齋宮跡中核部の解明も重要な課題である。

近年、地元からも史跡東部の整備を望む声が高まったことから、平成18年度に「史跡整備の在り方検討会」を開催し、柳原区画を中心とした史跡東部における整備の方向を示した。そして、平成22年3月に「史跡齋宮跡東部整備基本計画書」を策定し、平成23年度からは現地での工事に着手して平成27年10月、史跡公園「さいくう平安の杜」が竣工した。

一方、明和町でも「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づき、平成23年度から「明和町歴史的風致維持向上計画」の策定に取り組む。平成24年6月6日に国の認定を受けた。同計画では、下園東区画周辺において来訪者の案内・交流を目的とした整備を計画しており、それに先立って発掘調査を下園東区画において平成24年度に行い、平成27年度から工事に着手している。さらに、平成27年4月24日に「祈る皇女齋王のみやこ 齋宮」が日本遺産として認定された。

発掘調査

史跡東部の方格地割の構造解明は齋宮跡の発掘調査における重要課題の一つである。下園東区画においては、これまで区画中央から南東部を中心に調査が行われており、齋宮Ⅱ-1期からⅡ-2期にかけての5間×2間の大型掘立柱建物が規則的に配置さ

れていたことが確認されている。その一方で、区画の北西部では調査の及んでいない範囲が広く残されており、東側と同様の建物が区画の北西部にも展開するのかが解明することが危急の課題であった。

上記の課題を受け、下園東区画の実態解明を目的として、平成24年度には第178-2次調査を、そして平成27年度には第186次調査を実施した。調査面積は、第186次調査は536㎡で、調査期間は平成27年12月14日～平成28年3月30日であった。

整備

史跡東部整備事業は、柳原区画の発掘調査で確認した掘立柱建物3棟の復元や平安時代の方格地割の広がりを示す区画道路の整備など、平安時代の齋宮の姿を再現するもので、平成27年度は、復元建物建築工事が7月に完成し、基盤整備等工事の完成した10月に竣工した。その後、便益施設建築工事が平成28年1月に、造園整備等工事は3月に完成し、同月に整備事業報告書も刊行した。また、齋宮歴史博物館と上園芝生広場を結ぶ古代伊勢道（旧称：奈良古道）の整備工事も12月に完成した。

発掘調査現場の公開・活用

近年齋宮歴史博物館では、史跡への来訪者増加や魅力の向上を目標として、発掘調査現場の積極的な利活用を行っている。具体的には、発掘調査見学者への随時公開・説明、ホームページを通じた情報発信とともに、現地説明会や夏休み子ども体験発掘教室、学校団体等の体験発掘を開催している。

2 調査体制

史跡齋宮跡の調査・整備に関する業務は、齋宮歴史博物館調査研究課が担当した。当報告に関わる組織は以下の体制で行った。

<第186次調査>

・平成27年度

大川勝宏（課長）

徳積裕昌（主幹兼課長代理）

伊藤文彦（技師）

宮原佑治（技師）

・平成 28 年度

大川勝宏（課長）

穂積裕昌（主幹兼課長代理）

伊藤文彦（主査）

宮原佑治（主任）

[平成 27 年度指導委員]

浅野 聡（三重大学大学院准教授）

稲葉信子（筑波大学大学院教授）

金田章裕（人間文化研究機構機構長）

佐々木恵介（聖心女子大学教授）

鈴木嘉吉（元奈良国立文化財研究所長）

所 京子（岐阜聖徳学園大学名誉教授）

八賀 晋（三重大学名誉教授）

増淵 徹（京都橘大学教授）

松村恵司（奈良文化財研究所長）

渡辺 寛（皇學館大学名誉教授）

綿貫友子（大阪教育大学教授）

[研究員]

黒田龍二（神戸大学大学院教授）

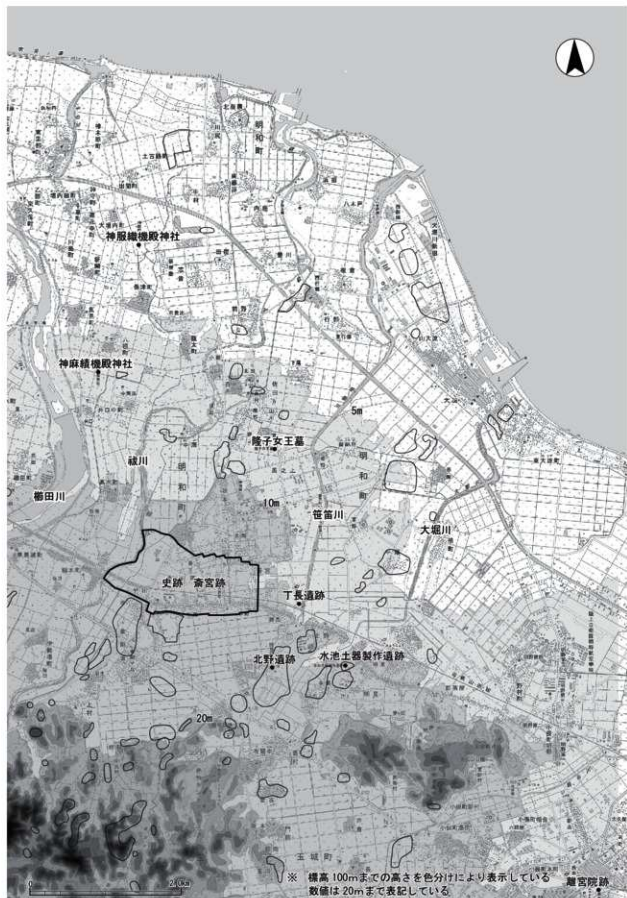
(五十音順・敬称略)

3 齋宮跡調査研究指導委員会

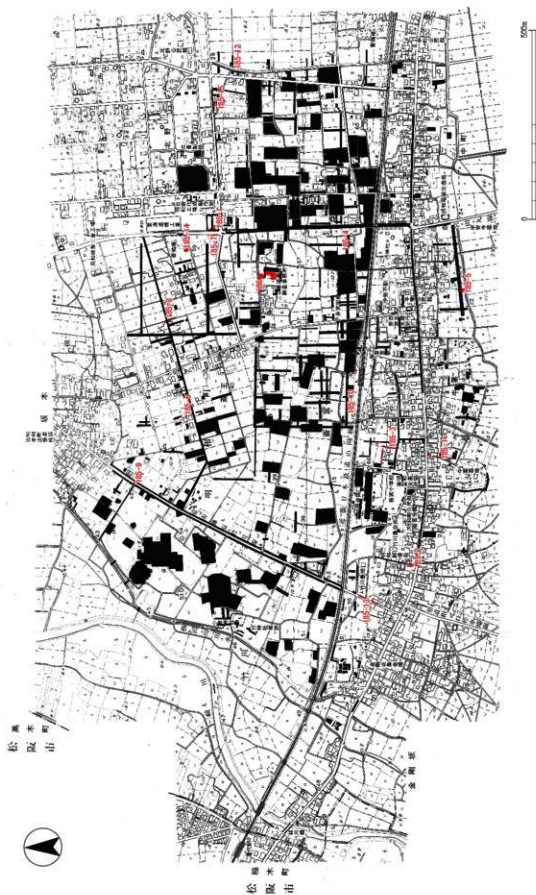
齋宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、平成 28 年 2 月 4 日に齋宮跡調査研究委員会を開催し、第 186 次調査を含む下園東区画の性格や明和町の整備事業について指導や助言を得たほか、復元建物については齋宮跡研究員も同席して指導を受けた。指導委員・研究員の方々は下記のとおりである。

調査次数	地区	面積 (㎡)	調査期間	位置	土地所有者	現状変更	保存地区 区分
186	Q8, Q9	536.0	H27. 12. 14～H28. 3. 30	明和町大字齋宮字下園	明和町	計画発掘調査	1
185-1	R7	23.2	H27. 7. 13～7. 14	明和町大字齋宮字西前沖	明和町	史跡齋宮跡維持管理 倉庫等建設	4
185-2	J12	12.0	H27. 7. 22～7. 27	明和町大字竹川字東裏	個人	住宅改築	4
185-3	L12, M12	72.2	H27. 8. 3～10. 16	明和町大字齋宮字広頭	明和町	プール移転	3
185-4	R11	0.5	H27. 8. 5～8. 6	明和町大字齋宮字柳原	明和町	史跡整備	1
185-5	Q14	23.3	H27. 8. 19～8. 28	明和町大字齋宮字鈴池	個人	住宅新築	3
185-6	M6, M7	4.7	H27. 9. 14～9. 29	明和町大字齋宮字藤林	個人	下水管	4
185-7	R7	28.3	H27. 9. 15	明和町大字齋宮字楽殿	明和町	休憩所建設等	1
185-8	P6	10.6	H27. 10. 6～10. 7	明和町大字齋宮字楽殿	個人	住宅新築	3
185-9	L5	2.7	H27. 10. 8	明和町大字竹川字古里	個人	住宅新築	3
185-10	M11, N11	2.4	H27. 10. 14	明和町大字齋宮字内山	明和町	史跡整備	1
185-11	L13	34.3	H27. 11. 4～11. 13	明和町大字齋宮字牛糞	個人	住宅新築	4
185-12	W8	0.0	H27. 10. 14	明和町大字齋宮字東前沖	明和町	排水路	3
185-13	H11, H12, I1	27.9	H27. 1. 26～	明和町大字竹川字中垣内	三重県	側溝付替	3
185-14	R7	61.4	H28. 2. 23～3. 15	明和町大字齋宮字楽殿	個人	住宅新築	3
185-15	V7	27.3	H28. 2. 23～3. 15	明和町大字齋宮字東前沖	個人	住宅新築	3

第 1 - 1 表 平成 27 年度発掘調査一覧表



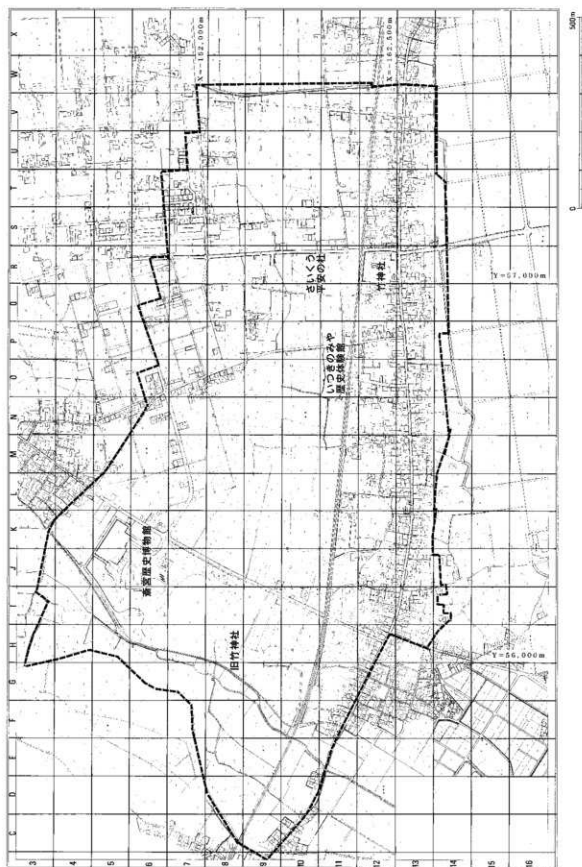
第 I - 1 図 史跡齋宮跡位置図 (1:50,000・国土地理院 1/25,000「松版」明野を改変)



第1-2图 平成27年度発掘調査区位置図 (1:10,000)



第1-3图 齊宮跡方格地割区画名称图 (1:5,000)



第 I - 4 図 史跡斎宮跡における大地区表示図 (2002 年)

Ⅱ 第186次調査 6AQ8・9下園地区

1 はじめに

第186次調査区は、平安時代斎宮の方格地割でいう下園東区画の北西隅部を中心に、方格地割区画道路（以下、区画道路）上に位置する。四周する区画道路を含めて、下園東区画では過去に、第8～10次・10次・13次・17次・18-1次・18-2次・23次・25-5次・156次・166次・168次・174-8次・176次・177次・178-2次・180次の計16回の調査が行われており、斎宮Ⅱ-1期からⅡ-2期の寮庫と考えられる5間×2間の掘立柱建物が区画全体に等間隔で展開することが明らかとなりつつある。これは東に隣接する西加座北区画でも確認されている延床55mを超える大型の5間×2間の掘立柱建物が等間隔で展開する様相と同様であり、このようなあり方は斎宮寮の倉庫、寮庫としての性格が考えられる。

第186次調査は、こうした寮庫のある下園東区画の北西隅部と下園西区画との境界区画道路の様相を解明するため、大型の5間×2間建物を確認した第178-2次調査区の西隣に調査区を設定した。以下、第186次の調査結果を報告する。なお、第186次調査の調査面積は536㎡、調査期間は平成27年12月14日～平成28年3月30日であった。

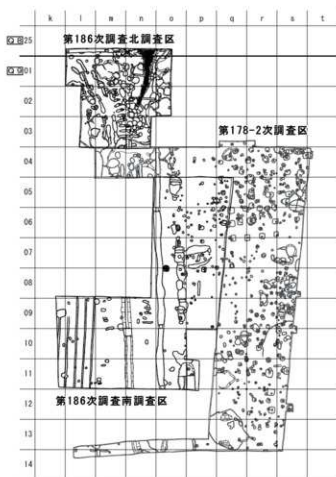
2 地形と層位

調査区は現況畑地の平坦地である。北調査区は全体が標高9.65～9.75mで推移し、大きく高さの変化はみられない。南調査区は北端で標高9.90～9.95mと北調査区よりも高く、南下するにつれて標高9.70～9.75mへと下がっていく。このことから南調査区の北端が周囲よりやや高くなる微起伏を有するが、南調査区の南方では、現況でも0.3m程低くなる箇所もあり、湿地状を呈している。また北調査区の地山面も水はけが悪く、降雨時には水没することが多くみられた。そのため、全体的に厚さ0.4～0.5mの盛土が近世に施されている。

基本層位は、北調査区で表土（耕作土）、近世盛土、包含層、地山からなり、地山面までの深さは0.65mある。南調査区では、表土（耕作土）、地山からなり、地山面までの深さは0.15～0.2mである。南調査区では耕作土が地山直上までみられ、包含層や黒ボク層は確認できなかった。地山はいずれも黄褐色系のシルトで、遺構の検出は礎敷遺構SZ10845を除き、地山の上面で行った。

3 遺構

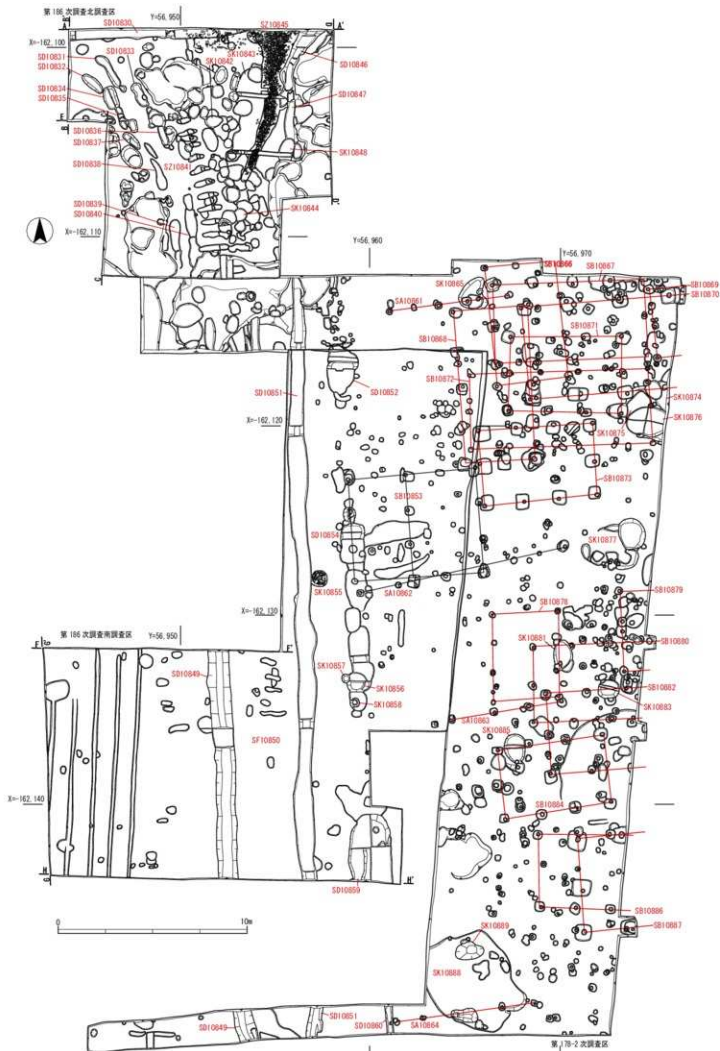
第186次調査では、道路に関わる遺構が数多く確認できた。一つ目は奈良時代末葉から平安時代初頭にかけて方格地割造成段階の南北区画道路の東側溝、二つ目は平安時代後期の方格地割北辺東西道路



第Ⅱ-1図 第186次調査 グリッド図 (1:500)

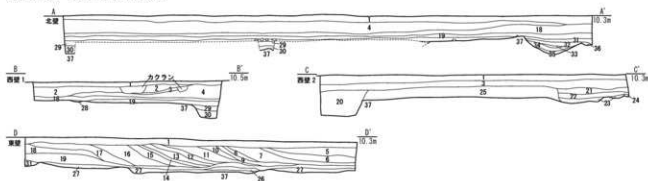


第Ⅱ-2図 第186次調査 調査区位置図 (1:2,000)



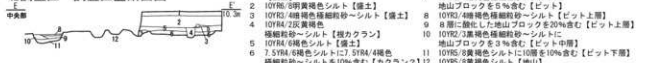
第 二 - 三 图 第 186 次 调 查 遗 构 平 面 图 (1:200)

北調査区 調査区壁断面図



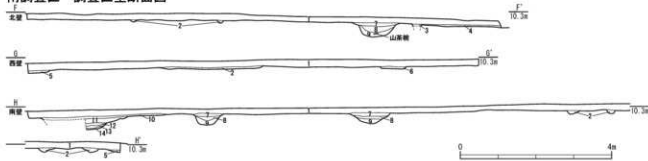
- | | | |
|---|---|--|
| <p>1 2.5Y/3 黒褐色極細粒砂【黄土】</p> <p>2 10YR4/6 褐色極細粒砂～シルト【黄土】</p> <p>3 10YR6/3 赤黄褐色シルト【黄土】</p> <p>4 10YR4/4 褐色極細粒砂【黄土】</p> <p>5 10YR4/4 褐色極細粒砂～シルト【黄土】</p> <p>6 7.5YR5/8 明褐色シルトに10YR3/4 極細色極細粒砂～シルトを層状に20%含む【黄土】</p> <p>7 10YR4/3 にふい黄褐色シルトに7.5YR5/8 明褐色シルトブロックを5%含む【黄土】</p> <p>8 10YR3/3 暗褐色極細粒砂～シルト【黄土】</p> <p>9 10YR4/2 にふい黄褐色シルトに7.5YR5/8 明褐色シルトブロックを30%含む【黄土】</p> <p>10 10YR3/4 暗褐色極細粒砂～シルト【黄土】</p> <p>11 10YR4/2 にふい黄褐色極細粒砂～シルト【黄土】</p> <p>12 10YR4/4 褐色極細粒砂～シルト【黄土】</p> <p>13 10層に7.5YR5/8 明褐色シルトブロックを5%含む【黄土】</p> <p>14 10YR3/4 暗褐色極細粒砂～シルト【黄土】</p> | <p>15 10層に7.5YR5/8 明褐色シルトブロックを5%、φ10cm以下の球をわずかに含む【黄土】</p> <p>16 12層にφ5cm以下の球をわずかに含む【黄土】</p> <p>17 10層と7.5YR5/8 明褐色シルトの層を含む【黄土】</p> <p>18 10YR4/3 にふい黄褐色極細粒砂～シルト【包含層】</p> <p>19 10YR3/3 暗褐色極細粒砂～シルト【包含層】</p> <p>20 10YR3/3 暗褐色中粒砂～極細砂【カクラン?】</p> <p>21 10YR6/3 赤黄褐色シルトに10YR3/3 暗褐色極細粒砂～シルトを10%含む【黄土】</p> <p>22 10YR3/3 ～3/4 暗褐色極細粒砂～シルトにφ5cm以下の球をわずかに含む【黄土】</p> <p>23 7.5YR5/8 黄褐色シルトに酸化褐色鉄を5%含む【黄土】</p> <p>24 10YR2/3 黒褐色極細粒砂～シルトに10YR6/3 明黄褐色シルトを層状に10%含む【黄土】</p> <p>25 5YR4/8 ～5/8 赤褐～明赤褐色シルトに灰七層を層状に3%含む</p> <p>26 10YR3/4 暗褐色シルトに7.5YR5/8 明褐色シルトを層状に30%含む【カクラン埋土】</p> | <p>27 10YR2/4 暗褐色シルトに7.5YR5/8 明褐色シルトを層状に10%含む【カクラン埋土】</p> <p>28 19層に地山を粒状に10%含む【ビット埋土】</p> <p>29 10YR2/2 黒褐色極細粒砂に10YR2/7 黒褐色シルトを粒状に5%含む【S D 10830 上層】</p> <p>30 10YR2/3 黒褐色極細粒砂に10YR2/2 黒褐色シルトを30%含む【S D 10830 下層】</p> <p>31 10YR2/4 暗褐色極細粒砂～極細砂 下層部に鉄分沈着【S D 10846 上層】</p> <p>32 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂に酸化褐色鉄を5%含む【S D 10846 上層】</p> <p>33 10YR4/3 にふい暗褐色中粒砂～極細砂【S D 10846 中層】</p> <p>34 10YR2/3 黒褐色シルト【S D 10846 下層】</p> <p>35 10YR3/3 暗褐色シルトに地山粒を20%含む【S D 10846 下層】</p> <p>36 31層に地山ブロックを20%含む【ビット埋土】</p> <p>37 10YR2/8 黄褐色シルト【地山】</p> |
|---|---|--|

北調査区 調査区壁断面図



- | | |
|---|---|
| <p>1 【黄土】</p> <p>2 10YR6/3 明黄褐色シルト【黄土】</p> <p>3 10YR3/4 暗褐色極細粒砂～シルト【黄土】</p> <p>4 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂～シルト【粗カクラン】</p> <p>5 10YR4/6 暗褐色シルト【黄土】</p> <p>6 7.5YR4/6 暗褐色シルトに7.5YR4/4 暗褐色極細粒砂～シルトを10%含む【カクラン?】</p> | <p>7 10YR2/4 暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを5%含む【ビット】</p> <p>8 10YR3/4 暗褐色極細粒砂～シルト【ビット上層】</p> <p>9 8層に酸化した地山ブロックを20%含む【ビット上層】</p> <p>10 10YR2/3 暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを3%含む【ビット中層】</p> <p>11 10YR5/8 暗褐色シルトに10層を10%含む【ビット下層】</p> <p>12 10YR5/8 暗褐色シルト【地山】</p> |
|---|---|

南調査区 調査区壁断面図



- | | |
|---|---|
| <p>1 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂～極細砂【黄土】</p> <p>2 10YR4/4 ～4/6 暗褐色極細粒砂～極細砂【耕作層】</p> <p>3 10YR2/4 暗褐色極細粒砂【ビット埋土】</p> <p>4 10YR4/4 暗褐色極細粒砂【包含層】</p> <p>5 10YR3/3 暗褐色極細粒砂～シルトに地山を粒状に15%含む【深いビット】</p> <p>6 10YR2/3 暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを10%含む【浅いビット】</p> <p>7 10YR4/3 にふい黄褐色極細粒砂【SD10849・10851上層】</p> <p>8 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂【SD10849・10851中層】</p> | <p>9 10YR3/2 暗褐色極細粒砂に地山ブロックを3%含む【SD10849・10851下層】</p> <p>10 10YR2/3 暗褐色極細粒砂～シルトに地山を粒状に30%含む【SD10859 上層】</p> <p>11 10YR2/2 暗褐色極細粒砂～極細砂【SD10859 下層】</p> <p>12 10YR2/3 暗褐色極細粒砂に地山を粒状に20%含む【SD10859 中層】</p> <p>13 10YR3/1 暗褐色極細粒砂に地山を粒状に10%含む【SD10859 中層】</p> <p>14 10YR2/2 暗褐色シルト【SD10859 下層】</p> <p>15 10YR5/8 黄褐色シルト【地山】</p> |
|---|---|

第Ⅱ-4図 第186次調査 土層断面図 (1:100)

の南側溝、三つ目は平安時代末葉から鎌倉時代初頭にかけての南北区画道路の東西の道路側溝とそれに伴う波板状凹凸遺構である。その他、道路に関わる可能性のある遺構として、平安時代末葉から鎌倉時代初頭の礎石遺構もみられた。

道路以外の遺構としては、掘立柱建物4棟、柱列1列、土坑8基などを確認した。遺構の時期幅は奈

良時代後葉から鎌倉時代初頭に及ぶ。また掘立柱建物については、第186次調査区内ではほとんど確認できず、南東に位置する平成24年度の第178-2次調査区に集中している。第178-2次調査区については未報告であるが、本調査区の建物の性格を把握するのに欠かせないため、第Ⅱ-3図に平面図のみを第186次調査区と合わせて掲載する。

(1) 斎宮Ⅰ-4～Ⅱ-2期の遺構

S B 10873 南調査区の q5・q6・q7・r5・r6・r7・s5・s6 で確認した桁行3間×梁間2間の掘立柱建物で、北西の柱穴1基以外は第178-2次調査により確認している。棟方向は、N6°Wの東西棟となり、梁間および桁行は1.8mもしくは2.1mとなる。柱掘方は一辺0.6～0.9mの隅丸方形を呈する。出土遺物は、第186次調査ではみられなかったが、遺構の時期は第178-2次調査の状況から斎宮Ⅰ-4期に該当する。

S B 10868 南調査区の q4・q5・q6・r4・r5・r6 で確認した桁行4間×梁間2間の掘立柱建物で、南西の柱穴4基以外は第178-2次調査により確認している。棟方向は、N4°Wの南北棟となり、梁間および桁行は1.8mもしくは2.1mとなる。柱掘方は一辺0.6～0.7mの隅丸方形を呈する。出土遺物は、第186次調査ではみられなかったが、遺構の時期は第178-2次調査の状況から斎宮Ⅱ-1～2期に該当する。

S D 10852 南調査区の o4・o5 で確認した溝で、平面形は、長さ2.6m、幅1.6mの楕円形を呈し、断面は深さ0.3mの皿状を呈する。出土遺物は、土師器「奉」あるいは「本」の刻書がある皿(1)、甕A(2)、須恵器杯あるいは壺(3)があり、遺構の時期は斎宮Ⅰ-4期に該当すると考えられる。灰軸陶器皿(4)は上層より出土しており、後世の混入品であろう。

S D 10854 南調査区の o7・o8・o9・p9 で確認した溝で、複数の土坑状の落ち込みが折り重なるようにして溝を形成している。平面形は、長さ9.8m、幅1.4m前後で、断面は深さ0.1m前後と浅く、正確な断面形状は不明である。出土遺物は少なく、因化できたものはなかった。

S D 10859 南調査区の o11・p11 で確認した溝で、平面形は、長さ2.8m以上、幅2.2m前後で、特に東側1.4m分が深い溝状を呈する。断面は深さ0.3mの逆台形状を呈する。出土遺物は、土師器杯A(5)、椀A(6・8)・皿A(7)・鉢(9)・甕(10～12)・鍋? (13)・須恵器杯B壺(14)・杯A(15)、壺(16)・盤(17)・平瓶(18)があり、遺構の時期は斎宮Ⅰ-4～Ⅱ-1期に該当すると考えられる。

S D 10852・S D 10854・S D 10859については、柳原地区で確認されている西辺区画道路の延長線上に該当し、溝群の主軸の角度がN4°Wとなる。このことから溝群は、下園東区画の西辺区画道路の東側溝を形成すると考えられ、出土遺物の年代から、方格地創造成段階の掘削が想定される。

S K 10856 南側調査区の o9 で確認した土坑で、平面形は、直径1.0mの正円形を呈し、断面は深さ0.2mの皿状を呈する。出土遺物は上層から、暗文のある土師器蓋(19)・皿A(23)・杯B(20)・ドーマン状の記号刻書皿A(21)・皿A(22)・杯G(24・25)・ドーマン状の記号刻書高杯(26)・甕(27・28)・下層から土師器杯G(29・30)があり、遺構の時期は斎宮Ⅰ-4～Ⅱ-1期に該当すると考えられる。

S K 10857 南調査区の o9 で確認した土坑で、平面形は0.5m×0.4mの小型楕円形を呈し、断面は深さ0.1mの皿状を呈する。遺物はS K 10856と同ほぼ同一レベルから出土しており、その埋没後に掘削されている。出土遺物は、土師器杯B(31)・暗文のある杯A(32)・線刻のある皿A(33)・鍋B(34)・移動式壺(35)があり、遺構の時期は斎宮Ⅰ-4～Ⅱ-1期に該当すると考えられる。

S K 10858 南側調査区の o9 で確認した土坑で、平面形は直径0.5mの正円形を呈し、断面は深さ0.2mの皿状を呈する。出土遺物は、土師器鍋A(36)・須恵器杯A(37)があり、遺構の時期は斎宮Ⅰ-4～Ⅱ-1期に該当すると考えられる。

S K 10856・10857・10858の3基の土坑は、プランやセクションで確認したところ、いずれもS D 10854の埋没後に掘削されている。それぞれの遺構の前後関係は、S K 10856がS K 10857の埋没後に掘削されたと考えられるが、遺物の出土状況や遺物の年代をみる限り、時期差はほぼ皆無と言える。S K 10858は1基だけ他の2基の土坑とは離れており、重複関係より遺構の時期差はみられないが、出土遺物の年代より、3基の土坑は溝の埋没後の間もない時期に掘削されたと考えられよう。なお、3基の土坑から出土した土器には、完形品も含まれており、雑然と廃棄されたような状況ではなかった。特にS K 10856からは、まじないに使用したと考えら

遺構位置図 (1:400)



SD10852 土層断面 (1:40)



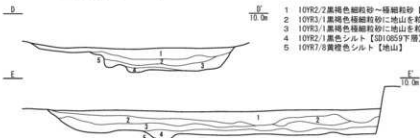
- 1 10YR3/3暗褐色極細粒砂に地山を粒状に5%含む【SD10852上層】
- 2 10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルトに地山を粒状に3%、炭化物を含む【SD10852上層】
- 3 10YR3/3～3/4暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを20%含む【SD10852上層】
- 4 10YR4/4～4/6暗褐色シルトに地山ブロックを30%含む【SD10852下層】
- 5 10YR4/6暗褐色シルト【SD10852下層】
- 6 10YR3/4暗褐色極細粒砂【根カクランヤ】
- 7 10YR5/8黄褐色シルト【地山】

SD10854 土層断面 (1:40)



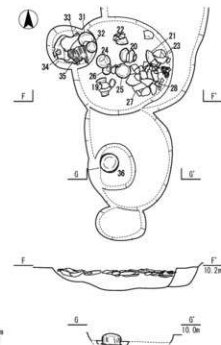
- 1 10YR2/1黒色極細粒砂【SD10854上層】
- 2 10YR2/1黒色極細粒砂に10YR7/8黄褐色シルトを20%含む【SD10854下層】
- 3 10YR5/4にぶい黄褐色シルト【SD10854下層】
- 4 10YR2/1黒色極細粒砂に炭化物をわずかに含む【SD10854上層】
- 5 10YR2/2黒褐色極細粒砂に地山ブロックを20%、炭化物をわずかに含む【SD10854下層】
- 6 10YR7/8黄褐色シルト【地山】

SD10859 土層断面 (1:40)

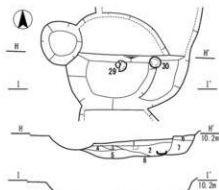


- 1 10YR2/2黒褐色細粒砂～極細粒砂【SD10859上層】
- 2 10YR2/1黒褐色極細粒砂に地山を粒状に20%含む【SD10859中層】
- 3 10YR2/1黒褐色極細粒砂に地山を粒状に10%含む【SD10859下層】
- 4 10YR2/1黒色シルト【SD10859下層】
- 5 10YR7/8黄褐色シルト【地山】

SK10856・10857・10858 出土状況 (1:40)



SK10856 下層出土状況 (1:40)



- 1 10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを10%含む【SK10856上層】
- 2 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを3%、炭化物を含む【SK10856中層】
- 3 10YR4/4～4/6暗褐色シルト【SK10856中層】
- 4 5YR2/4暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを5%含む【SK10856中層】
- 5 10YR4/6暗褐色シルト【SK10856下層】
- 6 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを20%含む【土坑上層】
- 7 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを30%含む【土坑下層】
- 8 10YR5/8黄褐色シルト【地山】

第Ⅱ-5図 第186次調査 SD10852・10854・10859 断面図、SK10856・10857・10858 出土状況図・断面図 (1:40)

れるドーマン状の記号を刻書した土師器が複数点出土しており、儀式的な所作を想定される。隣接するほぼ同時期のS K 10857・S K 10858からは、移動式竈と鍋、甕など、調理に伴う器種も含まれており、儀礼使用後の土器などを一括して廃棄した可能性も考えられる。

(2) 斎宮Ⅱ-3～Ⅱ-4期の遺構

S K 10842 北調査区のm1・m2・n1・n2で確認した土坑で、平面形は長さ0.9m×幅0.6mの不正楕円形を呈し、断面形状および深さは完掘していないため不明である。出土遺物は混入品である山茶碗(38)もあるが、上層より土師器杯A(39～41)・碗A(42)・皿A(43)・甕C(44)があり、遺構の時期は斎宮Ⅱ-2～3期に該当すると考えられる。

S K 10843 北調査区のn1・n2で確認した大型の土坑で、平面形は長さ6.2m×幅2.8mの不正形を呈し、断面形状は深さ0.3mの皿状を呈する。出土遺物は杯A(45)、灰釉陶器碗(46)・皿(47)・須恵器甕(48)・土鍾(49)があり、遺構の時期は斎宮Ⅱ-2期に該当すると考えられる。

S K 10844 北調査区のn3で確認した土坑で、平面形は長さ0.7×幅0.6m以上の正円形を呈し、断面形状および深さは完掘していないため不明である。出土遺物は須恵器杯B(50・51)・灰釉陶器皿(52)があり、遺構の時期は斎宮Ⅱ-2期に該当すると考えられる。

S K 10848 北調査区のn2で確認した土坑で、平面形は長さ1.2m以上×幅0.8mの楕円形を呈し、断面形状および深さは完掘していないため不明である。出土遺物は土師器碗A(53)があり、遺構の時期は斎宮Ⅱ-2期に該当すると考えられる。

S B 10872 南側調査区のq5・q6で確認した桁行5間×梁間2間の掘立柱建物で、西の柱穴3基以外は第178～2次調査により確認している。棟方向は、N3°Wの東西棟となり、梁間および桁行はそれぞれ1.8mと2.0mとなる。柱掘方は径0.3mの楕円形を呈する。出土遺物は、第186次調査ではみられなかったが、遺構の時期は第178～2次調査の状況から斎宮Ⅱ-3～4期に該当する。

S B 10853 南調査区のo6・o7・o8・p6・p7・p8・q6・q7で確認した桁行3間×梁間3間の西面庇付

と考えられる掘立柱建物で、東側柱筋は第178～2次調査により確認している。棟方向は、西庇と仮定するとN4°Wの南北棟となり、梁間および桁行は1.6m前後、庇の出は3.0m前後となる。柱掘方は一辺0.4～0.6mの隅丸方形か円形を呈する。出土遺物は、o6柱穴3から須恵器甕(55)があり、遺構の時期は斎宮Ⅱ-2期以降に該当すると考えられる。また暗文のある土師器皿A(54)は、o6柱穴AがS D 10854の埋没後に掘削されたため混入したものと考えられる。

(4) 斎宮Ⅲ期以降の遺構

S D 10830 北調査区の125・m25・n25で確認した溝で、平面形は、長さ9.4m以上、幅0.5m以上を呈し、断面は深さ0.35mの逆台形状を呈すると考えられる。主軸は、北側に道路が位置するため幅員を確認することができなかったことから、正確には不明瞭ではあるものの、概ねE3～4°Nと考えられ、方格地割の傾きとおおむね一致する。このことからS D 10830は、下園東区画における北辺区画道路の南側溝であると考えられる。底面の標高は、北西部が9.35mと低くなるが東側トレンチでは9.42mとやや高くなる。出土遺物は、灰釉陶器碗(56)、緑釉陶器(57)、平瓦(58)、土鍾(59)、温石(60)があり、その他にもロクロ土師器などの細片も見られたため、遺構の時期は斎宮Ⅲ期以降に該当すると考えられる。

S F 10850 関連遺構

S D 10831～10840 北調査区の11・m1・12・m2・13・m3で確認した溝群で、平面形状や深さに統一感は見られないが、底面の標高が、概ね9.5～9.65mとなる。後述する波板状凸凹面S Z 10841が本溝群と並行して南北に延びていることから、S D 10849と同様にS F 10850西側道路側溝を形成する溝群と考えられる。特にS D 10831とS D 10832、S D 10839とS D 10840のあり方をみると、北調査区では本来2条の溝が並行していた可能性があり、西側は道路側溝、東側は楕円形の溝と考えられる。また、S D 10846と同様に南から北に延びるにつれ、西側へ弧状に曲がり、S D 10830と交差すると考えられる。出土遺物は少なく、S D 10836の土鍾(61)のみ図化できた。その他の土師器、灰釉陶器などは、

いずれも細片であった。遺構の時期は、出土した土器や埋土の様相などから、斎宮Ⅲ期以降に該当すると考えられる。

S D 10846 北調査区の n25・o25・n1・o1 で確認した溝で、S D 10831～10840と同様に南から北に向けて東側へ弧状に曲がる。平面形は長さ3.3m以上、幅1.2mで、断面は深さ0.3mのU字形を呈する。S D 10847・S D 10851と同様にS F 10850の東道路側溝に該当すると考えられ、底面の標高は北端が最も低く9.33mとなり、南側ではやや高くなる。出土遺物は、山茶碗やロクロ土器の細片のほか、須恵器蓋(62)・杯B(63)・灰釉陶器鉢(64)があり、遺構の時期は、斎宮Ⅲ-1～2期以降に該当すると考えられる。

S D 10847 北調査区の n1・n2 で確認した溝で、南側をS K 10848の掘削により失っている。平面形は長さ2.6m以上、幅0.6mで、断面は深さ0.2mの逆台形を呈する。S D 10846・S D 10851と繋がりが、S F 10850の東道路側溝に該当すると考えられる。底面の高さは9.45mとなり、S D 10846・S D 10851と大差ない。出土遺物は、ロクロ土器台付小皿(65)があり、遺構の時期は、斎宮Ⅲ-1～2期以降に該当すると考えられる。

S D 10849 南調査区の m8・n8・m9・n9・m10・n10・m11・n11 で確認した溝で、北側も南側も調査区外に続き、南側の第178-2次調査区内では東側にやや曲がる。平面形は長さ12.1m以上、幅1.2mで、断面は深さ0.4mの逆台形を呈する。S F 10850の西側道路側溝に該当する。底面の高さは北から南まで標高9.55m前後となる。出土遺物は、陶器の山皿(66)・陶器の山茶碗(67-68)があり、遺構の時期は、斎宮Ⅲ-3～4期前後に該当すると考えられる。

S D 10851 南側調査区の n5・o5・n6・o6・n7・o7・o8・o9・o10・o11 で確認した溝で、北側も南側も調査区外に続き、南側の第178-2次調査区内では西側にやや曲がる。平面形は長さ31.8m以上、幅1.0mで、断面は深さ0.3mの逆台形を呈する。S F 10850の東側道路側溝に該当する。底面の標高は北から南まで9.5～9.6mで推移する。出土遺物は、青磁碗(69)のほか、陶器の山茶碗やロクロ土器の細片があり、遺構の時期は、斎宮Ⅲ期以降に該当

すると考えられる。

S Z 10841 北調査区の m1・m2・m3・n3 で確認した波板状凹凸面を構成する溝群で、個々の溝の大きさは長さ0.8～1.6m、幅0.3m程の長楕円形を呈する。各溝は概ね0.4m程の間隔で並び、底面の標高は9.56～9.64mとなる。また各溝の底面には小礫や土器細片などがバラス状に敷かれているものもみられた。先述したとおりS D 10831～10840と並行し、南から北へ弧状の平面配置を呈する。そのため、S F 10850の道路幅全面に凹凸面は展開せず、西側に偏って、道路側溝S D 10831～10840でも内側の溝群と隣接する。このことからS Z 10841とS D 10831～10840は連動する遺構の性格が考えられる。出土遺物はいずれも細片化しているが、灰釉陶器碗(70・71)のみ図化できた。遺構の年代は遺物の年代よりも新しく、斎宮Ⅲ-1～2期以降に該当すると考えられる。

S Z 10845 北調査区の m25・n25・n1・n2 で確認した礫敷遺構で、5cm以下の小礫から、20cm程の礫など、大小様々の大きさの礫が敷かれている。石材にもまとまりがなく、チャートや砂岩、結晶片岩など種々の川原石を中心に構成されている。平面形は、北側は調査区外へと続くため、全体の形状はわからないが、長さ8.2m以上、幅0.4～2.2mと南端で最も狭く、北端で最も広くなる舌状を呈している。S D 10846と並行するものの、S D 10847とは離れるため、S F 10850に伴う性格の遺構であるかは断定できない。出土遺物は土器器杯A(72)・須恵器長頸瓶(73)・円面碗(74)・甕(75)・灰釉陶器碗(76～81)・瓶(82)・陶器の山茶碗(83・84)があり、遺構の時期は斎宮Ⅲ-3～4期前後に該当すると考えられる。

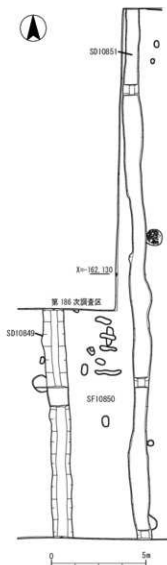
S K 10855 南調査区の o7・o8 で確認した集石土坑で、平面形は径0.8mの円形を呈し、断面形状は深さ0.4mの逆台形を呈する。集石は5cm～20cm程の円礫が主体で、意図的に埋納された状態ではなく、乱雑に置かれており、一部で土器片などを含む。また被熱痕や炭化物の出土はなかった。石材はチャートや砂岩などの川原石で構成されている。出土遺物は上層から土器器蓋A(85)・須恵器コップ形鉢(86)が、礫と混在して灰釉陶器碗(87)・ロクロ土器小皿(88)があり、遺構の時期は斎宮Ⅲ-1～2期

以降に該当すると考えられる。

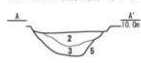
S A 10862 南調査区の o8・p8・q7・r7 で確認した柵列で、東側は第 178 - 2 次調査で確認している。柱間は 2.0 m、2.4 m、2.0 m、1.6 m、2.4 m の 5 間で、

方位は E12° N となる。柱掘方は一辺 0.3 ~ 0.6 m の円形や 0.2 m の隅丸方形を呈する。出土遺物は、柱穴から瓦器椀 (89) があり、遺構の時期は竊瓦 III 期以降に該当すると考えられる。

SF10850 断面図位置図 (1:200)



SD10851 断面図 (1:40)

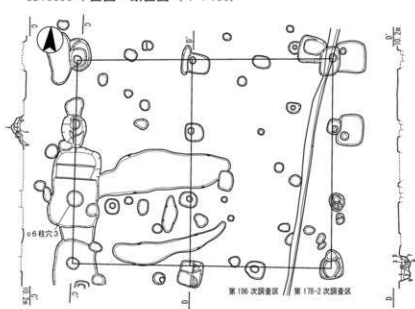


SD10849・SD10851 断面図 (1:40)



第 II - 6 図 第 186 次調査 SB 10853 平面図・断面図 (1:100)、出土状況図 (1:20)、SD 10849・10851 (SF 10850) 断面図 (1:40)

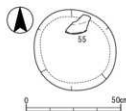
SB10853 平面図・断面図 (1:100)



C-C' 開土層注記

- 1 10YR2/1黒色極細粒砂【o7柱穴5柱底上層】
- 2 10YR2/1黒色極細粒砂に地山ブロックを10%含む【o7柱穴5柱底下層】
- 3 10YR2/2黒褐色極細粒砂に地山ブロックを30%含む【o7柱穴5掘方埋土上層】
- 4 10YR4/4褐色シルト【o7柱穴5掘方埋土下層】
- 5 10YR1.7/1-2/1黒色極細粒砂〜シルト【ピット上層】
- 6 10YR1.7/1-2/1黒色極細粒砂〜シルトに地山ブロックを10%含む【ピット下層】
- 7 10YR5/9黄褐色シルト【地山】

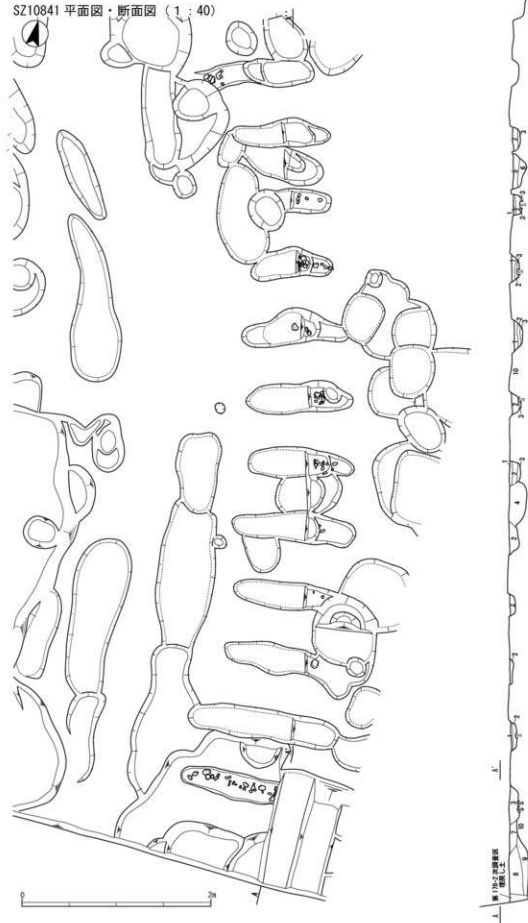
SB10853 o6 柱穴 3 出土状況 (1:20)



SD10849・SD10851 土層注記

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂【上層】
- 2 10YR4/2灰黄褐色極細粒砂【中層】
- 3 10YR2/2黒褐色極細粒砂に地山ブロックを3%含む【下層】
- 4 10YR2/2黒褐色極細粒砂〜シルトに地山ブロックを20%含む【埋土上層】
- 5 10YR5/9黄褐色シルト【地山】

SZ10841 平面図・断面図 (1:40)



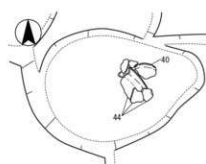
- 1 10954.2に広い黄褐色細砂 [SZ10841遺土上層]
- 2 10954.2に広い黄褐色細砂→黒細砂に
- 3 10952.4黄褐色シルトブロックを5%含む [SZ10841遺土中層]
- 4 10952.4黄褐色細砂→黒細砂、下部に50cm以下の層を有し [SZ10841遺土下層]
- 5 10952.2黄褐色細砂→シルト【ピット遺土上層】
- 6 6層に黒山ブロックを5%含む【ピット遺土下層】
- 7 7.595.08黄褐色シルトに10954.4黄褐色細砂を約10%含む【土佐遺土】
- 8 6層に黒山を約10%含む【土佐遺土】
- 9 6層に黒山を約10%含む【土佐遺土】
- 10 7.595.08黄褐色シルト【黒山】

第II-7図 第186次調査 SZ10841平面図・断面図 (1:40)

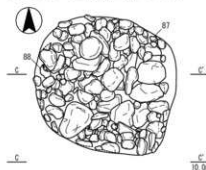
SZ10845 平面図・断面図 (1:40)



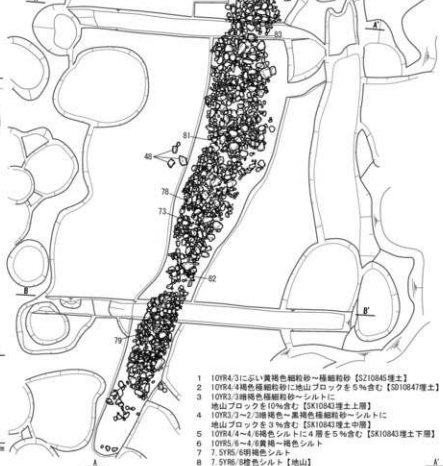
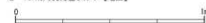
SK10842 出土状況図 (1:20)



SK10855 出土状況図 (1:20)



- 1 10YR3/4暗褐色極細粒砂に地山を粒状に20%含む【SK10855埋土】
- 2 10YR5/9黄褐色シルト【地山】



- 1 10YR4/3にふい黄褐色極細砂～極細粒砂【SZ10845埋土】
- 2 10YR4/4褐色極細粒砂に地山ブロックを5%含む【SZ10847埋土】
- 3 10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを10%含む【SK10843埋土上層】
- 4 10YR3/2-2/3暗褐色～黄褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを3%含む【SK10843埋土中層】
- 5 10YR4/4-4/6褐色シルトに4層を5%含む【SK10843埋土下層】
- 6 10YR5/1-4/6黄褐色～褐色シルト
- 7 7.5YR5/6明褐色シルト
- 8 7.5YR5/8褐色シルト【地山】



第II-8図 第186次調査 SZ10845 平面図・断面図 (1:40)、SK10842・10855 出土状況図・断面図 (1:20)

遺構名	調査時 遺構名	ピット番号		時期	規模 間(m)×間(m)	柱間寸法 (m)	主軸	方位 (N規準)	備考
		※()はグリッド番号							
SA 10862	178-2次 186次	一 柱列1	(r7)p2/(q8)p2/(p8)p1	Ⅲ以降	4~5(10.8)	2.1	東西	N14° W	
SB 10853	186次	建物1	(o6)柱穴3/(p6)p1/(q7)柱 穴3,柱穴5/(p8)柱穴4	Ⅱ-2以降	3(5.1)×3(6.6)	(桁行) 1.7 (梁間) 1.8 (庇出) 3.0	南北	N3° W	西庇
SB 10868	178-2次 186次	建物5 建物2	(q4)p7,p8/(r4)p1/(q5)p4, 柱穴1,(r5)p19,p16/(q6)p2, 柱穴2/(r6)p3,p12	Ⅱ-1~2	4(7.6)×2(3.5)	(桁行) 1.7 (梁間) 1.5	東西	N4° W	
SB 10872	178-2次 186次	建物11 建物3	(q5)p1,p3,p6/(r5)p17,p21/ (s5)p8,p17/(r6)p9/(s6)p2,p	Ⅱ-3~4	5(9.0)×2(3.7)	(桁行) 1.8 (梁間) 1.85	東西	N3° W	
SB 10873	178-2次 186次	建物4	(q6)p4,p5/(r6)p1,p3,p6,p1 4/(q7)p1/(r7)p1	I-4	3(5.9)×2(3.8)	(桁行) 1.95 (梁間) 1.9	東西	N6° W	

第Ⅱ-1表 第186次調査 掘立柱建物一覧表

遺構名	調査時 遺構名	グリッド	時期	出土遺物	備考	
SD 10830	186次	溝1	I25~n25	土師器、須恵器、灰軸陶器碗、緑軸陶器碗、土鐘、平瓦、瀝石	北辺道路南側側溝 SX10845Iに切られる	
SD 10831	186次	溝27	Ⅱ	なし		
SD 10832	186次	溝28	Ⅱ	なし		
SD 10833	186次	溝29	Ⅱ	なし		
SD 10834	186次	溝11	Ⅱ	土師器		
SD 10835	186次	溝30	Ⅱ	なし		
SD 10836	186次	溝4	m2	土師器、土鐘	南北道路側溝	
SD 10837	186次	溝9	Ⅱ	土師器		
SD 10838	186次	溝32	m2	なし		
SD 10839	186次	溝15	m3	土師器		
SD 10840	186次	溝13	m3	土師器、須恵器、灰軸陶器		
SZ 10841	186次	溝5他	m1~n3	灰軸陶器小碗	波板状凹凸面	
SK 10842	186次	土坑2	m1~m2	Ⅱ-2~3	土師器杯・皿・甕、上層より山茶碗	
SK 10843	186次	土坑4	n1~n2	Ⅱ-2	土師器杯・皿、須恵器甕、灰軸陶器碗、土鐘	SX10845Iに切られる
SK 10844	186次	土坑8	n3	Ⅱ-2	須恵器台付鉢、灰軸陶器皿、白磁碗	
SZ 10845	186次	礎敷	n25~n2	Ⅲ-3以降	土師器杯、須恵器長頸壺・平底鉢・円面碗、灰軸陶器鉢・壺、山茶碗	
SD 10846	186次	溝2	o25~n2	Ⅲ以降	須恵器甕・台付鉢、山茶碗大鉢	SD10847・SD10851と一連の溝か?
SD 10847	186次	溝3	n1~n2	Ⅲ以降	ロクロ土師器台付小皿	SD10846・SD10851と一連の溝か?
SZ 10848	186次	土坑3	n2	Ⅱ-2	土師器杯	
SD 10849	178-2次 186次	溝25	n9~n11	Ⅲ-3以降	土師器、ロクロ土師器、須恵器、灰軸陶器、山茶碗	
SF 10850	186次	道路1	I25~o11	Ⅲ以降	なし	
SD 10851	178-2次 186次	溝1 溝21	n5~o11	Ⅲ以降	土師器、ロクロ土師器、須恵器、灰軸陶器、山茶碗、青磁	SD10846・SD10847と一連の溝か?
SD 10852	186次	土坑10	o4~o5	I-4	須恵土師器皿、土師器皿・甕、須恵器杯、灰軸陶器小皿	SD10854・10859と一連の溝か?
SB 10853	186次	建物1	o6~p8	Ⅱ-2以降	o6柱穴3土師器皿、須恵器皿	SD10854・SB10872・10873を切る SA10862Iに切られる
SD 10854	186次	溝24	o7~p9	I-4~Ⅱ-1	土師器鉢	SD10852・10859と一連の溝か?
SK 10855	186次	土坑12	o7~o8	Ⅲ以降	土師器甕、ロクロ土師器小皿、須恵器鉢・壺、山茶碗	
SK 10856	186次	土坑16	o9	I-4~Ⅱ-1	須恵土師器高杯・皿、土師器杯・台付杯・壺・皿・鉢・甕	SK10857Iに切られる
SK 10857	186次	土坑14	o9	I-4~Ⅱ-1	須恵土師器皿、土師器杯・台付杯・壺・甕	SK10856を切る
SK 10858	186次	土坑19	o9	I-4~Ⅱ-1	土師器甕、須恵器	
SD 10859	186次	土坑20	o11~p11	I-4~Ⅱ-1	土師器杯・壺・皿・鉢・甕・瓶、須恵器杯・壺・甕・瓶	SD10852・10854と一連の溝か?
SA 10862	186次	柱列1	r7~p8	Ⅲ以降	なし	SB10853を切る
SB 10868	178-2次 186次	建物5 建物2	q4~r6	Ⅱ-1~2	(r6P12)土師器皿、須恵器蓋	SB10870を切る SB10866Iに切られる
SB 10872	178-2次 186次	建物11 建物3	q5~s6	Ⅱ-3~4	(r5P17)土師器鉢、灰軸陶器碗、(s5P9)土師器台付杯	
SB 10873	178-2次 186次	建物4	q5~s6	I-4	(r6P1)土師器甕、(r7P1)須恵器蓋	SB10853Iに切られる

第Ⅱ-2表 第186次調査 遺構一覧表

4 遺物

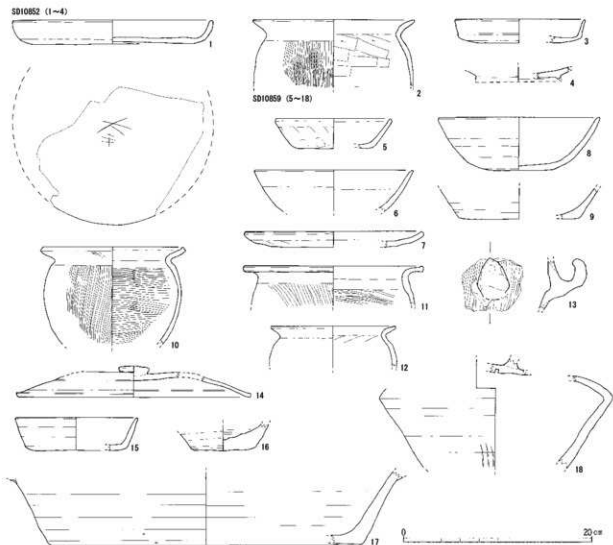
遺物はコンテナバット36箱分が出土した。

(1) 斎宮Ⅱ-2期以前の遺構出土遺物

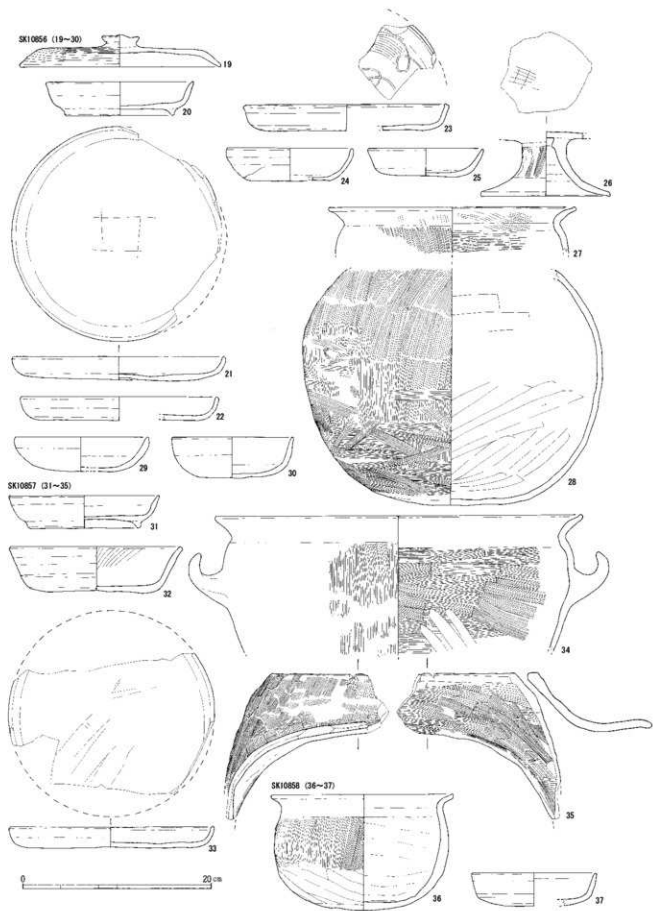
SD 10852 出土遺物(1~4) (1)は刻書のある土師器皿である。平坦な底部に「奉」あるいは「本」の文字が刻まれている。類似する資料は西加座南区画に3例が集中しており、第83次調査で刻書土師器、第86次調査で墨書須恵器、第156次調査で墨書土師器がいずれも異なる土坑から出土している。神殿地区と考えられる西加座南区画の性質を反映している文字の可能性もあり今後注意が必要であろう。(2)は土師器甕Aで、口縁部はやや厚手で、端部は面をもたない。胴部は大部分が失われているものの球状を呈さない。(3)は須恵器杯Aあるいは

は蓋で、口縁部はわずかに外反する。以上は、斎宮Ⅰ-4期に属する。(4)は灰軸陶器皿で、上層からの出土のため、混入品と考えられる。

SD 10859 出土遺物(5~18) (5)は土師器杯Aで口縁部は外傾し、端部を丸く取る。(6・8)は土師器碗Aで口縁部はやや内湾し、端部を丸く取る。底部は平坦である。(7)は土師器皿Aで口縁部は強く外傾し、立ち上がりが小さい。(9)は土師器鉢の底部と考えられ、底部は明確な後縁を持ち形成されている。(10~12)は土師器甕で、(10)の口縁部はやや内湾し、端部に面を持つ。胴部は球状を呈す。(11)の口縁部は水平となるほど強く外反し、端部を肥厚させる。胴部は失っているものの、球状を呈さない。(12)はやや小型の甕で、やや厚手の短い口縁部が外傾し、端部を丸く取る。



第Ⅱ-9図 第186次調査 出土遺物実測図1(1:4)



第II-10图 第186次調査 出土遺物実測図2 (1:4)

胴部は球状を呈す。(13)は土師器鍋もしくは瓶の把手で、胴部との接合は丁寧にナデつけている。(14)は須恵器杯Bに伴う蓋で、頂部には宝珠ツマミを持つ。外面に一条の沈線を有し、口縁端部がわずかに肥厚および外反する。(15)は須恵器杯Aで、口縁部はわずかに外傾する。(16)は須恵器壺の底部と考えられる。(17)は須恵器壺で、胴部に把手が取りつくと考えられる影が残り残存する。(18)は平瓶で、肩部に把手と考えられる突起を有する。いずれも斎宮Ⅰ-4～Ⅱ-1期に属する。

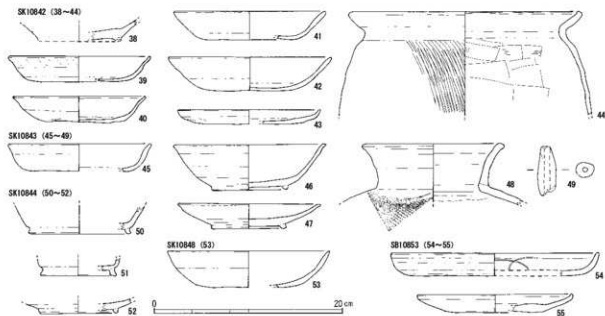
SK 10856 出土遺物 (19～30) (19)は土師器蓋で、頂部には宝珠ツマミを持つ。(20)は土師器杯Bで、口縁部はわずかに外反する。高台は逆台形を呈す。(21)は刻書土師器皿Aで、かなり磨滅しているもの、見込み面にドーマン状の記号が刻まれている。(22)は土師器皿Aで、口縁部がやや外傾し、端部を丸く収める。(23)は暗文のある土師器皿Aで、内面に螺旋状の暗文が施されている。口縁部は外傾し、端部には一条の段差がめぐる。(24・25)は土師器杯Gで、(24)は口縁部がわずかに内傾し、端部を丸く収める。(25)は口縁部が外傾し、端部がわずかに外反する。(26)は刻書土師器高杯で、杯部見込み面にドーマン状の記号が刻まれている。(27・28)は土師器壺で、(27)は口縁部が外傾し、端部を丸く肥厚させる。(28)は胴部のみであるが、

球状を呈する。(29・30)は下層から出土した土師器杯Gで、口縁部から底部にかけては丸く成形されており、在来系の土師器の特徴を色濃く有している。上層、下層ともに斎宮Ⅰ-4～Ⅱ-1期に属する。**SK 10857 出土遺物 (31～35)** (31)は土師器杯Bで、口縁部は外傾し内面がわずかに肥厚する。高台は逆台形を呈する。(32)は暗文のある土師器杯Aで、磨滅しているものの内面口縁部に放射状の暗文が残る。器高がやや高く、口縁部はゆるやかに外傾する。(33)は刻書のある土師器皿Aで、磨滅により底部に刻まれた線刻はほぼ失われている。(34)は土師器鍋Bで、口縁部は外傾し、端部内面はなでにより凹む。胴部内外面にはハケ目がみられる。(35)は土師器移動式甕で、内外面にハケ目がみられるが、笑口部および口縁部はナデ消されている。いずれも斎宮Ⅰ-4～Ⅱ-1期に属する。

SK 10858 出土遺物 (36～37) (36)は土師器鍋Aで、口縁部は短く外傾する。(37)は須恵器杯Aで、口縁部はわずかに外傾する。いずれも斎宮Ⅰ-4～Ⅱ-1期に属する。

(2) 斎宮Ⅱ-2～Ⅱ-4期の遺構出土遺物

SK 10842 出土遺物 (38～44) (38)は陶器の山茶碗で、高台端部を欠損しているものの、低い高台を有する。上層部から出土したことと、その他の遺物の時期から混入品と考えられる。(39～41)は土



第Ⅱ-11 図 第186次調査 出土遺物実測図3 (1:4)

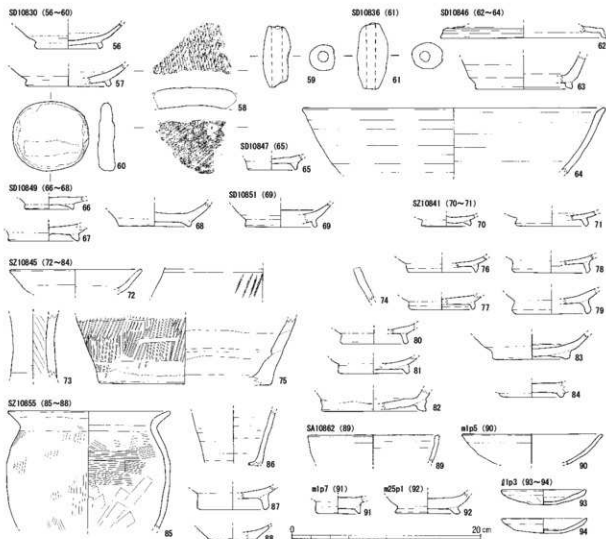
師器杯Aで、(39・40)は口縁部がわずかに外反する。(41)は口縁部が外傾し、端部はわずかに肥厚する。(42)は土師器杯Aで、口縁部が外傾する。(43)は土師器皿Aで、器高が低く、口縁端部をヨコナデし、外面に面をもつ。(44)は土師器甕Cで、口縁部をヨコナデし外面に面をもつ。口縁端部が内面に肥厚する。いずれも斎宮Ⅱ-2～3期に属する。

S K 10843 出土遺物 (45～49) (45)は土師器杯Aで、口縁部がわずかに外反する。(46)は灰軸陶器碗で、口縁端部が外反し、やや丸みのある逆台形の高台をもつ。(47)は灰軸陶器皿で、口縁端部がわずかに外反し、逆台形で外開きの高台をもつ。(48)は須恵器の甕で、外面に平行タキを施す。(49)は管状土鍾である。いずれも斎宮Ⅱ-2期に属する。

S K 10844 出土遺物 (50～52) (50・51)は須恵器杯Bで、(50)は口縁部に向けてやや外傾する。高台はやや外反する。(51)は小型で、口縁部に向けて直立する。高台は外反し、底面がナデにより凹む。(52)は灰軸陶器皿で、高台はやや丸みを帯びている。(50・51)はやや古く感じるが、概ね斎宮Ⅱ-2期に属する。

S K 10848 出土遺物 (53) (53)は土師器碗Aで、口縁部はわずかに内湾する。斎宮Ⅱ-2期に属する。

S B 10853 出土遺物 (54～55) (54)は暗文のある土師器皿Aで、内面に螺旋状の暗文が施されている。柱穴の上層より出土し、周囲にはⅠ-4期に遡ると考えられるSD 10854が位置しており、他の遺物の状況も考えると混入品の可能性が高い。(55)



第Ⅱ-12図 第186次調査 出土遺物実測図4 (1:4)

は焼成のあまい須恵器盤で、口縁部がわずかに内湾し、底部が平坦となる。蓋の可能性も考えられる。斎宮Ⅱ-2期以降と考えられる。

(3) 斎宮Ⅲ期以降の遺構出土遺物

SD 10830 出土遺物 (56 ~ 60) (56) は灰釉陶器碗で、丸みを帯びた三日月高台を有する。(57) は緑釉陶器碗で、見込み面にトチン跡が残る。(58) は平瓦で、磨減が著しいものの凸面には縄目タタキ、凹面には布目痕が明瞭に残る。(59) は管状土錘、(60) は温石と考えられる円形に加工した片岩質の石製品である。図化した土器は斎宮Ⅱ-4期以前まで遡るが、遺構の時期はⅢ期以降と考えられる。

SD 10836 出土遺物 (61) (61) は管状土錘で、時期は不明である。

SD 10846 出土遺物 (62 ~ 64) (62) は須恵器の杯Bに伴う蓋で、口縁端部内面に面を持つ。(63) は須恵器杯Bで高台はやや内傾する逆台形を呈する。(64) は灰釉陶器の鉢で、体部が緩やかに内湾する。端部外面はわずかに外反し、端部内面には面をもつ。須恵器は斎宮Ⅰ期まで遡る資料であるが、上層出土のため混入と考えられる。灰釉陶器は斎宮Ⅲ-1~2期に属し、こちらが遺構の時期を示している遺物であろう。

SD 10847 出土遺物 (65) (65) はロクロ土師器台付小皿で高台は三角形を呈する。斎宮Ⅲ-1~2期に属する。

SD 10849 出土遺物 (66 ~ 68) (66) は陶器山皿、(67・68) は陶器山茶碗である。(68) は遺構最下層から出土し、斎宮Ⅲ-3~4期に属するとみられる。

SD 10851 出土遺物 (69) (69) は越州窯系の青磁碗である。

SZ 10841 出土遺物 (70・71) (70) は灰釉陶器小碗で、三角高台をもつ。(71) は灰釉陶器碗である。斎宮Ⅲ-1~2期に属する。

SZ 10845 出土遺物 (72 ~ 84) (72) は土師器杯で、口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収める。(73) は須恵器長頸瓶などの頸部である。(74) は須恵器円面視の脚部で、外面には櫛状工具による刺突が施されている。(75) は須恵器甕の底部で、内面は丁寧にナデる。(76 ~ 81) は灰釉陶器碗、(82) は灰釉陶器瓶の底部である。(83・84) は陶器山茶碗で、

斎宮Ⅲ-3~4期に属する。その他の遺物は確とともに入れた遺物であろう。

SK 10855 出土遺物 (85 ~ 88) (85) は土師器甕Aで、口縁部は外傾し、端部を丸く収める。(86) は須恵器小型鉢で、どちらも上層からの出土であり混入品であろう。(87) は灰釉陶器碗で、ずんぐりとした三日月高台を有する。(88) はロクロ土師器小皿で、斎宮Ⅲ-1~2期に属する。

SA 10862 出土遺物 (89) (89) は瓦器碗の口縁部で、わずかに内湾し、端部に面をもつ。斎宮Ⅲ期以降に属する。

ビッド出土遺物

m1p5 出土遺物 (90) (90) は土師器杯で、口縁部は外傾し、端部は角張る。斎宮Ⅱ-4~Ⅲ-1期に属する。

m1p7 出土遺物 (91) (91) はロクロ土師器台付杯で、斎宮Ⅲ-2期に属する。

m25p1 出土遺物 (92) (92) は陶器山茶碗で、斎宮Ⅲ-3~4期に属する。

l1p3 出土遺物 (93・94) (93・94) は土師器小皿で、斎宮Ⅲ期に属する。

(4) 包含層・表土出土遺物

包含層出土遺物 (95 ~ 110) (95) はロクロ土師器小皿の台部。(96) は灰釉陶器碗で、外反する角高台を有する。(97・99) は灰釉陶器瓶で、(98) は灰釉陶器小瓶である。(100・101) は灰釉陶器鉢で、細い三角高台と外反する角高台をもつ。(102) は青磁碗、(103 ~ 106) は白磁碗、(107) は白磁皿、(108) は青白磁合子蓋である。(109) は管状土錘、(110) は石器未製品で、石材は黒色チャートである。

表土出土遺物 (111 ~ 121) (111) は土馬の尻尾部で、脚部の剥離箇所には棒状の有機質を差し込んだ痕跡がみられる。斎宮Ⅰ期にまで遡る。(112) は土師器杯、(113) は土師器高杯脚部、(114) 灰釉陶器碗、(115・116) は緑釉陶器碗、(117) は陶器山皿で、見込み面に漆が付着している。(118・119) は白磁碗、(120) は管状土錘である。その他、カクランより近世陶磁器の三足香炉が出土している。

5 まとめ

今回の調査は、下園東区画の北西隅部と下園西区画との境界における区画道路の実態解明を目的として実施した。

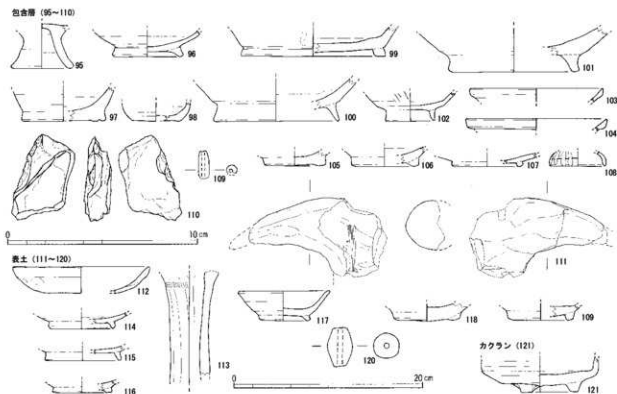
(1) 区画道路の変遷について

下園東区画の西端部ではこれまで、第47次や第178-2次調査が行われているが、調査範囲が狭く、確実に区画道路に伴う道路側溝の確認には至っていなかった。しかし、今回の調査区において確認できたS D 10852・10854・10859は遺構深度の差異によって、部分的に失われてはいるものの、出土遺物の年代から、方格地割造成当初の下園東区画の西辺区画道路の東側溝の一部と考えられよう。こうした南北区画道路側溝の脆弱な状況は、柳原区画の西辺道路側溝等でも確認されており⁽¹⁾、柳原から下園東区画へと一連に繋がる西辺道路側溝の機能的な性格を表している可能性がある。また、S D 10859埋没後に重複して掘削されたS K 10956・10857・10858か

ら出土した土器群は、S D 10859の示す年代から大きく乖離するものではなく、年代差はほほないものと考えられることから、S D 10859が埋没して道路側溝としての機能を失うまでは極めて短期間であったことが想定できる。

次に平安時代末業以降の造成となるS F 10850とその道路側溝群は、側溝間の幅が、交差点付近の最大幅で約14mであるが、最小幅は南端部の約3mと、方格地割造成時の道路計画幅約15mよりもかなり狭く変質している。そして、交差点部には人や牛馬の往来を示すものと考えられる⁽²⁾波板状凹凸面(S Z 10841)がみられ、側溝は排水機能を有する深度を有することから、実用性を重視した道路として機能したことが想定される。

以上から、下園東区画西辺道路、特に東側道路側溝は、造成時からあまり時を経ずして機能を失っていた可能性があり、その後は平安時代末業以降に実用性の高い道路として再敷設された変遷をたどることが明らかとなった。



第II-13図 第186次調査 出土遺物実測図5 (110のみ1:2、1:4)

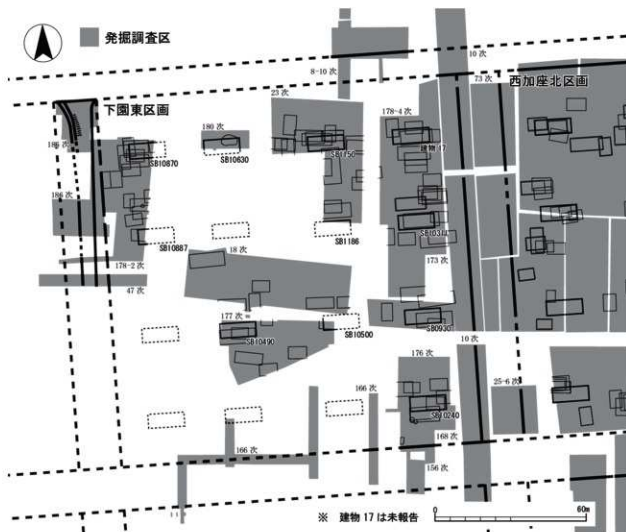
(2) 波板状凹凸面と礫敷遺構について

波板状凹凸面(S Z 10841)は、西辺道路面に約0.4mの間隔で小溝群が道路軸と直交、西側道路側溝となる溝群と湾曲しながら並行する。対して礫敷遺構(S Z 10845)は道路中央部から東側側溝と並行して湾曲し、調査区外へと幅を広げながら続く。過去に史跡内では、第3次調査のS D 4500や第37-4次調査のS F 2427で波板状凹凸面が確認されており、特にS F 2427では、十字状交差点に凹凸面が形成され、その直上に礫敷遺構が確認されている。このような前例から、今回確認したS Z 10841およびS Z 10845は同一道路面に形成された類似した性格の遺構である可能性が浮上してくる。またこの周囲は、南側の調査区と比較して、標高が低く、水はけが著しく悪い。こうした箇所に部分的に礫敷を施

すことで、泥濘による牛馬歩行の障害を取り除く工夫が施された可能性が考えられよう。

註

- (1) 大川勝宏 2014「柳原区面の遺構」『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ』柳原区面の調査 遺構・遺構総括編 斎宮歴史博物館
- (2) 川部浩司 2012「波板状凹凸面からみた伊勢地域の道路遺構」『Mie history』Vol.21 三重歴史文化研究会



第Ⅱ-14図 下園東区面の調査成果 (1:1500)

番号	部種	部形	地区遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	粘土	地味	色調	残存度	備考	登録番号
1	土師器	皿	SD10852	口径 20.8 底径 16.9 高さ 7.1	内面:コナダグ・ヘラズリ 口縁:コナダグ 外面:コナダグ	密良	黄	黄2.5YR6/7	口縁部 2/12	底部に刺青・朱い?	019-01
2	土師器	甕A	SD10852	口径 13.5 底径 2.5 高さ 13.5	内面:コナダグ・ロクロナダグ 外面:コナダグ	密良	良	にぶい・黄緑10YR7/3	口縁部 3/12		003-03
3	煮炊器	杯	SD10852	口径 8.0 底径 1.2 高さ 1.2	外面:南切取・高台付コナダグ 内面:白土系312 裏地:灰黄・5Y7/2	密良	良	灰黄1/12	煮炊器	煮炊器	003-02
4	灰釉陶器	皿	SD10859	口径 12.0 底径 3.2 高さ 5.2	内面:コナダグ・オセエナダグ 外面:コナダグ	密良	良	にぶい・黄緑10YR7/3	口縁部 5/12		007-05
5	土師器	杯A	SD10859	口径 16.6 底径 5.6 高さ 5.6	内面:オセエナダグ 外面:コナダグ	密良	良	黄2.5YR6/8	口縁部 2/12		007-04
6	土師器	皿A	SD10859	口径 18.4 底径 1.7 高さ 1.7	内面:コナダグ・ナダグ 外面:コナダグ	密良	良	黄2.5YR6/6	口縁部 1/12		009-03
7	土師器	杯A	SD10859	口径 16.8 底径 5.6 高さ 5.6	内面:ヘラズリ・コナダグ 外面:コナダグ・ナダグ	密良	良	にぶい・黄7.5YR6/4	口縁部 3/12	輸入品	011-02
8	土師器	皿	SD10859	口径 14.7 底径 10.3 高さ 10.3	内面:コナダグ 外面:コナダグ	密良	良	黄2.5YR6/8	口縁部 2/12		009-05
9	土師器	甕A	SD10859	口径 18.6 底径 4.2 高さ 4.2	内面:コナダグ 外面:コナダグ	密良	良	にぶい・黄7.5YR7/4	口縁部 1/12		011-01
10	土師器	甕A	SD10859	口径 13.0 底径 4.1 高さ 4.1	内面:コナダグ 外面:コナダグ	密良	良	にぶい・黄緑10YR6/3	口縁部 2/12	マズ	010-04
11	土師器	鉢?	SD10859	口径 5.4 底径 5.4 高さ 5.4	内面:コナダグ・オセエナダグ 外面:コナダグ・ヘラズリ	密良	良	灰黄緑10YR6/2	把手のみ	鉢か瓶?	009-04
12	土師器	杯形直造	SD10859	口径 12.7 底径 3.5 高さ 3.5	内面:コナダグ・ロクロナダグ 外面:コナダグ	密良	良	灰黄2.5YR6/2	口縁部 1/12		011-03
13	煮炊器	杯A	SD10859	口径 12.7 底径 3.5 高さ 3.5	内面:コナダグ・ロクロナダグ 外面:コナダグ	密 不良	良	にぶい・黄7.5YR6/4	口縁部 2/12	生焼け	011-05
14	煮炊器	直	SD10859	口径 6.4 底径 2.8 高さ 2.8	内面:コナダグ 外面:コナダグ	密良	良	灰5YR5/1	底部劣形		009-02
15	煮炊器	平盤	SD10859	口径 32.2 底径 7.8 高さ 7.8	内面:把手輪付・ロクロズリ・ロクロナダグ 外面:コナダグ	密良	良	灰白2.5Y7/1	底部1/12		010-01
16	煮炊器	平盤	SD10859	口径 24.6 底径 9.8 高さ 9.8	内面:コナダグ・ロクロナダグ 外面:コナダグ	密良	良	にぶい・黄2.5YR6/3	肩部4/12		007-02
17	土師器	甕	SK10856 No.1	口径 20.9 底径 3.4 高さ 3.4	内面:フタ輪付・ヘラズリ・ミガキコナダグ 外面:ミガキコナダグ	密良	良	黄2.5YR7/6	口縁部 8/12		003-03
18	土師器	杯B	SK10856 No.6	口径 3.6 底径 3.6 高さ 3.6	内面:高台付コナダグ 外面:コナダグ	密良	良	黄2.5YR6/6	口縁部 8/12		005-02
19	土師器	皿A	SK10856 No.11	口径 22.1 底径 2.6 高さ 2.6	内面:ヘラズリ・コナダグ・ナダグ 外面:コナダグ・オセエナダグ	密良	良	黄2.5YR7/6	口縁部 7/12	見込面にびーワン状 記号の刺青	020-01
20	土師器	皿A	SK10856 No.3	口径 20.5 底径 2.5 高さ 2.5	内面:ヘラズリ・ベナダグ・コナダグ 外面:コナダグ	密良	良	黄2.5YR6/8	口縁部 2/12		005-03
21	土師器	皿A	SK10856 No.11	口径 21.0 底径 2.8 高さ 2.8	内面:ヘラズリ・ヘラナダグ・コナダグ 外面:コナダグ・ナダグ・刺青状埋文2条	密良	良	黄2.5YR7/6	口縁部 5/12	小破片以外は磨滅	007-01
22	土師器	杯G	SK10856 No.2	口径 13.0 底径 3.4 高さ 3.4	内面:コナダグ・オセエナダグ 外面:コナダグ・ナダグ	密良	良	灰黄2.5Y7/3	口縁部 3/12	粘土混合痕あり	004-05
23	土師器	杯G	SK10856 No.3	口径 11.9 底径 2.9 高さ 2.9	内面:コナダグ・ヘラナダグ 外面:コナダグ・オセエナダグ	密良	良	にぶい・黄緑10YR7/4	口縁部		004-06
24	土師器	高杯	SK10856 No.3	口径 13.4 底径 6.9 高さ 6.9	内面:ヘラズリ・ミガキ・ヘラズリ付コナダグ 外面:ヘラズリ・ミガキ・オセエナダグ	密良	良	黄2.5YR6/6	底部6/12	見込面にびーワン状 記号の刺青	019-02
25	土師器	甕	SK10856 No.9	口径 25.7 底径 4.1 高さ 4.1	内面:コナダグ 外面:コナダグ	密良	良	黄2.5YR7/6	口縁部 3/12	28と同一体か?	006-02
26	土師器	甕	SK10856 No.8	口径 24.7 底径 3.6 高さ 3.6	内面:コナダグ・オセエナダグ 外面:コナダグ	密良	良	灰黄緑10YR8/4	口縁部 10/12	内部磨滅 27と同一体か?	008-01
27	土師器	杯G	SK10856 下層No.2	口径 13.9 底径 3.6 高さ 3.6	内面:コナダグ・オセエナダグ 外面:コナダグ	密良	良	灰黄緑10YR8/4	口縁部 4/12		004-03
28	土師器	杯G	SK10856 下層No.1	口径 12.5 底径 4.1 高さ 4.1	内面:コナダグ・オセエナダグ 外面:コナダグ	密良	良	にぶい・黄緑10YR7/3	口縁部		004-04
29	土師器	杯B	SK10857 No.5	口径 15.6 底径 3.4 高さ 3.4	内面:高台付コナダグ 外面:コナダグ	密良	良	黄7.5YR7/6	口縁部 7/12		004-01
30	土師器	杯A	SK10857 No.4	口径 17.7 底径 4.9 高さ 4.9	内面:ヘラズリ・コナダグ 外面:コナダグ・ナダグ・敷射状埋文	密良	良	黄2.5YR7/6	口縁部 6/12		004-02
31	土師器	皿A	SK10857 No.3	口径 21.9 底径 2.5 高さ 2.5	内面:ヘラズリ・コナダグ 外面:コナダグ	密良	良	にぶい・黄7.5YR6/4	口縁部 2/12	見込面に不明刺青	021-01
32	土師器	鉢?	SK10857 No.6	口径 14.6 底径 2.9 高さ 2.9	内面:コナダグ・オセエナダグ 外面:ヘラズリ・コナダグ	密良	良	灰黄緑10YR8/3	口縁部 3/12		006-01
33	土師器	甕	SK10857 No.1	口径 21.0 底径 15.4 高さ 15.4	内面:コナダグ・オセエナダグ 外面:コナダグ	密良	良	にぶい・黄2.5YR6/3	口縁部 2/12		005-01
34	煮炊器	杯A	SD10858	口径 13.0 底径 3.5 高さ 3.5	内面:コナダグ・ロクロナダグ 外面:コナダグ	密良	良	にぶい・黄緑10YR7/4	口縁部	内外面に磨付着	009-01
35	煮炊器	杯A	SD10858	口径 8.7 底径 2.1 高さ 2.1	内面:南切取・高台付・ロクロナダグ 外面:コナダグ	密 不良	良	灰黄2.5YR7/2	口縁部 3/12		001-07
36	土師器	杯A	SK10842	口径 14.7 底径 2.7 高さ 2.7	内面:オセエナダグ・コナダグ 外面:コナダグ	密良	良	黄2.5YR6/8	口縁部 3/12		001-01
37	土師器	杯A	SK10842	口径 13.7 底径 2.8 高さ 2.8	内面:オセエナダグ・コナダグ 外面:コナダグ	密良	良	黄2.5YR6/6	口縁部 6/12		001-04
38	土師器	杯A	SK10842	口径 15.7 底径 3.6 高さ 3.6	内面:オセエナダグ・コナダグ 外面:コナダグ	密良	良	黄2.5YR6/6	口縁部 1/12		001-02
39	土師器	杯A	SK10842	口径 14.8 底径 1.5 高さ 1.5	内面:オセエナダグ・コナダグ 外面:コナダグ	密良	良	にぶい・黄7.5YR6/4	口縁部 1/12		001-06
40	土師器	甕C	SK10842 No.7	口径 23.7 底径 11.1 高さ 11.1	内面:ヘラズリ・コナダグ 外面:コナダグ	密良	良	にぶい・黄緑10YR7/4	口縁部 2/12		001-03

第Ⅱ-3表 第186次調査 遺物観察表(1)

番号	器種	器形	地区 遺跡	面積 (cm)	調整・技法の特徴	粘土	焼成	色調	残存度	備考	登録 番号
45	土師器	杯A	SK10843 No.2	口径 14.8 底径 2.9 内径:ココナダ	外面:ココナダ 内面:ココナダ	密	良	緑SV8/8	口縁部 2/12	外面磨減	002-03
46	灰輪陶器	甌	SK10843上 層	口径 15.6 底径 4.8 外径 7.6 内径:ココナダ	外面:高台黏付・ロコケズリ・ロコナダ 内面:ココナダ	密	良	輪:色800 素地:灰白SV7/1	口縁部 5/12		002-05
47	灰輪陶器	甌	SK10843上 層	口径 14.5 底径 2.7 内径:ココナダ	外面:高台黏付・ロコケズリ・ロコナダ 内面:ココナダ	密	良	輪:朱藍色864 素地:灰白SV7/1	口縁部 9/12		002-02
48	灰土器	甌	SK10843 No.1	口径 14.0 底径 6.6 内径:上層・ナダ・ココナダ	外面:平打タタキ・ロコナダ 内面:上層・ナダ・ココナダ	密	良	輪:緑系815 素地:灰SV6/1	口縁部 7/12		002-04
49	土製品	土牌	SK10843 上層	長さ 5.2 幅 0.55 全高:ナダ	全面:ナダ	密	良	にじみ・黄緑10Y86/3	ほぼ完全	重さ14.68g	021-02
50	灰土器	杯B	SK10844	口径 10.1 底径 3.0 内径:ココナダ	外面:糸切痕・高台黏付・ロコナダ 内面:ココナダ	密	良	灰白SV7/1	底部1/12		002-08
51	灰土器	杯B	SK10844	口径 7.8 底径 1.9 内径:ココナダ	外面:糸切痕・高台黏付・ロコナダ 内面:ココナダ	密	良	灰2.SV6/1	底部2/12		002-08
52	灰輪陶器	甌	SK10844	口径 7.9 底径 1.5 内径:ココナダ	外面:糸切痕・高台黏付・ロコナダ 内面:ココナダ	密	良	輪:山鳩色822 素地:灰白SV7/1	底部2/12	重ね焼き痕あり	002-06
53	土師器	甌A	SK10848	口径 16.9 底径 3.9 内径:ココナダ	外面:ナサエ・ナダ・ココナダ 内面:ココナダ	密	良	緑SV8/8	口縁部 1/12		002-01
54	土師器	甌A	SK10853 66付穴3	口径 21.6 底径 2.5 内径:ココナダ	外面:ヘラケズリ・ナダ・ココナダ・軽黄状埋文 内面:ココナダ	密	良	緑SV8/6	口縁部 1/12・底部 1/12	口唇部に割欠あり	012-05
55	灰土器	甌	SK10853 67付穴3	口径 18.2 底径 1.9 内径:ココナダ	外面:糸切痕・ロコケズリ・ロコナダ 内面:ココナダ	密	不良	灰黄緑10Y88/4		生焼け	011-07
56	灰輪陶器	甌	SD10830	口径 6.8 底径 2.7 内径:ココナダ	外面:糸切痕・高台黏付・ロコナダ 内面:ココナダ	密	良	輪:黄色818 素地:灰白SV7/1	底部5/12		014-02
57	灰輪陶器	甌	SD10830 上層	口径 8.3 底径 2.4 内径:ココナダ	外面:糸切痕・高台黏付・ロコナダ 内面:ココナダ	密	良	輪:抹茶色838 素地:灰白SV7/1	底部2/12	重ね焼き痕あり	021-03
58	瓦	平瓦	SD10830 上層	長さ 6.5 幅 1.1 厚さ 1.9	全面:ナダ・ナサエ	密	良	緑SV8/6	-		014-01
59	土製品	土牌	SD10830 上層	長さ 8.1 幅 7.4 厚さ 1.8	全面:ナダ・ナサエ	密	良	緑2.SV7/6	完全	外面に数箇所着 重さ41.25g	021-04
60	石製品	磨石	SD10830 上層	長さ 8.1 幅 7.4 厚さ 1.8		-	-	-	完全	結晶片岩	025-01
61	土製品	土牌	SD10830 上層	長さ 7.0 幅 3.2 厚さ 1.0	全面:ナダ	密	良	にじみ・黄緑10Y86/3	完全	重さ50.67g	021-04
62	灰土器	甌	SK10846 上層	口径 17.3 底径 1.4 内径:ココナダ	外面:ココナダ 内面:ココナダ	密	良	硬灰黄2.SV5/2	口縁部 1/12・底部 1/12	僅少?	014-03
63	灰土器	杯B	SK10846 上層	口径 10.1 底径 3.5 内径:ココナダ	外面:糸切痕・高台黏付・ロコケズリ・ロ コナダ、内面:ココナダ	密	良	灰2.SV8/1	口縁部 1/12・底部 1/12		014-04
64	灰輪陶器	甌	SK10846	口径 11.6 底径 7.8 内径:ココナダ	外面:ココナダ 内面:ココナダ	密	良	黄灰2.SV86/1	口縁部 1/12		015-01
65	ロコケ 土師器	付付小皿	SD10847 上層	口径 4.9 底径 1.6 内径:ココナダ	外面:糸切痕・高台黏付・ロコナダ 内面:ココナダ	密	良	灰黄緑10Y88/3	底部8/12		014-05
66	陶器	山瓦	SD10849	口径 5.0 底径 1.3 内径:ココナダ	外面:糸切痕・高台黏付・ロコケズリ 内面:ココナダ	密	良	灰黄2.SV87/2	底部4/12		015-06
67	陶器	山瓦	SD10849	口径 7.2 底径 1.8 内径:ココナダ	外面:糸切痕・高台黏付・ロコケズリ 内面:ココナダ	密	良	灰黄2.SV8/3	底部12/12		016-01
68	陶器	山瓦	SD10849 下層No.1	口径 7.4 底径 2.5 内径:ココナダ	外面:糸切痕・高台黏付・ロコケズリ・ロ コナダ、内面:ココナダ	密	良	灰白SV7/1	底部 完全	底部にヤシラ痕	015-05
69	青磁	甌	SD10851 上層	口径 7.4 底径 2.5 内径:ココナダ	外面:高台黏付・ロコナダ 内面:ココナダ	密	良	輪:緑系色897 素地:灰黄2.SV6/2	底部1/12 未達	重ね焼き痕あり	022-02
70	灰輪陶器	小甌	SD10841	口径 4.9 底径 1.6 内径:ココナダ	外面:高台黏付・ナダ・ロコケズリ 内面:ココナダ	密	良	灰白2.SV7/1	底部4/12		015-02
71	灰輪陶器	甌	SD10841	口径 7.2 底径 1.6 内径:ココナダ	外面:高台黏付・ナダ・ロコケズリ 内面:ココナダ	密	良	輪:朱藍色838 素地:灰白SV7/1	底部4/12		015-03
72	土師器	杯	SD10845	口径 13.7 底径 2.5 内径:ココナダ	外面:ナサエ・ナダ・ココナダ 内面:ココナダ	密	良	にじみ・黄2.SV86/4	口縁部 2/12		013-07
73	灰土器	長頸甌	SD10845 No.11	口径 6.9 底径 1.9 内径:ココナダ	外面:ココナダ・洗練 内面:シボ	密	良	灰NS/	底部 1/12		013-06
74	灰土器	円面甌	SD10845	口径 3.2 底径 3.9 内径:ココナダ	外面:ココナダ・磨削痕 内面:ココナダ	密	良	灰黄2.SV6/2	胴部1/12 未達		022-04
75	灰土器	甌	SD10845 No.69-70	口径 17.7 底径 7.1 内径:ココナダ	外面:タタキ・ナサエ・ナダ 内面:ココナダ	密	良	灰白SV7/1	底部2/12		013-01
76	灰輪陶器	甌	SD10845	口径 7.1 底径 1.7 内径:ココナダ	外面:糸切痕・高台黏付・ロコナダ 内面:ココナダ	密	良	灰黄2.SV7/2	底部3/12		013-08
77	灰輪陶器	甌	SD10845	口径 6.5 底径 1.5 内径:ココナダ	外面:糸切痕・高台黏付・ロコナダ 内面:ココナダ	密	良	灰黄2.SV7/2	底部3/12		013-03
78	灰輪陶器	甌	SD10845 No.2	口径 7.1 底径 1.9 内径:ココナダ	外面:糸切痕・高台黏付・ロコナダ 内面:ココナダ	密	良	灰白2.SV7/1	底部4/12		013-04
79	灰輪陶器	甌	SD10845 No.7	口径 7.5 底径 2.7 内径:ココナダ	外面:糸切痕・高台黏付・ロコナダ 内面:ココナダ	密	良	灰黄2.SV7/2	底部4/12		012-08
80	灰輪陶器	甌	SD10845 No.77	口径 6.7 底径 2.2 内径:ココナダ	外面:糸切痕・高台黏付・ロコナダ 内面:ココナダ	密	良	灰白2.SV7/1	底部2/12		012-09
81	灰輪陶器	甌	SD10845 No.18	口径 6.9 底径 1.7 内径:ココナダ	外面:糸切痕・高台黏付・ロコナダ 内面:ココナダ	密	良	灰黄2.SV7/2	口縁部 3/12	重ね焼き痕あり	013-05
82	灰輪陶器	甌	SD10845 No.9	口径 10.5 底径 2.3 内径:ココナダ	外面:高台黏付・ナダ・ココナダ 内面:ココナダ・ナサエ	密	良	輪:朱藍色814 素地:黄灰2.SV86/1	底部2/12		013-02
83	陶器	山瓦	SD10845 No.2	口径 7.4 底径 2.7 内径:ココナダ	外面:糸切痕・高台黏付・ロコケズリ 内面:ココナダ	密	良	灰白2.SV7/1	口縁部 4/12	重ね焼き痕あり	012-07
84	陶器	山瓦	SD10845 No.5	口径 6.2 底径 1.6 内径:ココナダ	外面:糸切痕・高台黏付・ロコケズリ 内面:ココナダ	密	良	灰黄2.SV7/2	底部1/12 未達	底部に磨痕あり	022-05
85	土師器	甌A	SK10855 上層	口径 16.9 底径 12.5 内径:ココナダ	外面:ヘラケズリ・ココナダ 内面:ココナダ	密	良	灰黄緑10Y88/3	口縁部 2/12		003-04

第Ⅱ-4表 第186次調査 遺物観察表(2)

番号	器種	器形	地区 遺跡	出土層	法長 (cm)	調整・技法の特徴	粘土	地色	色調	残存度	備考	登録 番号
86	煎茶器	鉢	SK10855 上層	底径 5.7	外周:ロクロズリ・ロクロナデ 内周:ロクロナデ	密	良	灰SV6/1	—	—		003-07
87	灰輪陶器	小皿	SK10855 No.3	底径 6.8	外周:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 2.5内周:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5V7/2	底面1/12			003-07
88	ロクロ 土師器	小皿	SK10855 No.1	底径 4.6	外周:糸切痕・ロクロナデ 1.5内周:ロクロナデ	密	良	灰黄黄10V8/3	底面5/12			003-05
89	瓦器	碗	m1p	口径 13.6	外周:ロクロナデ	密	良	外周:灰C4/4 内周:灰白2.5V8/1	口縁部 1/12			012-06
90	土師器	碗	m1p5	口径 14.6	外周:オサエ・ナデ・ロクロナデ 3.2内周:ロクロナデ	密	良	灰SV8/6	口縁部 2/12			012-01
91	ロクロ 土師器	台付鉢	m1p7	底径 4.3	外周:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 1.3内周:ロクロナデ	密	良	灰黄黄10V8/4	底面6/12	見込みに面は磨		022-01
92	陶器	山茶碗	m2p1	底径 6.3	外周:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 2.3内周:ロクロナデ	密	良	灰白2.5V8/1	底面3/12			012-04
93	土師器	小皿	m1p3	口径 8.7	外周:オサエ・ナデ・ロクロナデ 1.1内周:ロクロナデ	密	不 良	灰白2.5V8/2	口縁部 5/12			012-02
94	土師器	小皿	m1p3	口径 8.9	外周:オサエ・ナデ・ロクロナデ 1.6内周:ロクロナデ	密	良	にじみ・黄緑10V8/3	8/12			012-03
95	土師器	台	包含層	底径 5.9	外周:ロクロナデ 4.7内周:工具ナデ・ロクロナデ・ナデ	密	良	灰黄黄10V8/2	底面9/12			017-06
96	灰輪陶器	碗	包含層	底径 6.9	外周:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 3.1内周:ロクロナデ	密	良	輪・黄緑色35 表層:灰白2.5V7/2	底面6/12			017-01
97	灰輪陶器	碗	包含層	底径 6.3	外周:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 3.7内周:ロクロナデ	密	良	灰白2.5V7/1	底面6/12			017-02
98	灰輪陶器	小型皿	包含層	底径 5.0	外周:糸切痕・ロクロズリ・ロクロナデ 1.9内周:ロクロナデ	密	良	輪・オリーブ色816 表層:灰白SV8/2	底面1/12	小型模造品		023-07
99	灰輪陶器	瓶	包含層	底径 15.3	外周:高台貼付・ロクロズリ・ロクロナデ 3.1内周:ロクロナデ	密	良	輪・肉色白系812 表層:灰白2.5V8/1	底面3/12			017-03
100	灰輪陶器	鉢	包含層	底径 13.0	外周:高台貼付・ロクロズリ 4.4内周:ロクロナデ	密	良	輪・山鳩色822 表層:灰白2.5V7/1	底面2/12			017-04
101	灰輪陶器	鉢	包含層	底径 12.8	外周:高台貼付・ロクロナデ 4.0内周:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5V8/2	底面2/12			017-05
102	青磁	碗	包含層	底径 5.9	外周:ケツ出し・高台・ロクロズリ・ロクロ ナデ 3.0ナデ・内周:ロクロナデ	密	良	輪・肉色白系812 表層:灰白SV8/1	底面6/12			024-01
103	白磁	碗	包含層	口径 13.8	外周:ロクロナデ 1.4内周:ロクロナデ	密	良	輪・水磨993 表層:灰白2.5V8/2	1/12未満	口縁部		023-06
104	白磁	碗	包含層	口径 14.2	外周:ロクロナデ 1.5内周:ロクロナデ	密	良	輪・肉色白系812 表層:灰白2.5V8/2	1/12未満	口縁部		023-05
105	白磁	碗	包含層	底径 5.9	外周:ケツ出し・高台・ロクロナデ 1.5内周:ロクロナデ	密	良	輪・水磨993SV6/2 表層:灰白2.5V7/1	口縁部		ほぼ完形	024-04
106	白磁	碗	包含層	底径 6.1	外周:ケツ出し・高台・ロクロナデ・沈 没 2.0内周:ロクロナデ	密	良	輪・青白磨989 表層:灰白SV7/1	底部 2/12			024-03
107	白磁	皿	包含層	底径 6.9	外周:高台貼付・ロクロズリ 1.4内周:ロクロナデ	密	良	輪・象牙色789 表層:灰白2.5V8/2	底部 2/12			024-02
108	青白磁	合子皿	包含層	口径 5.9	外周:ロクロナデ 1.5内周:ロクロナデ	密	良	輪・青白磨986 表層:灰白SV8/1	口縁部 2/12			023-03
109	土製品	土埴	包含層	長さ 2.9 幅 0.35	全面:ナデ	密	良	灰黄2.5V7/3	1/2程度	重さ3.06g		023-04
110	石器	木製品	包含層	長さ 4.1 幅 2.8	—	—	—	—	—	黒色系チャート 重さ25.0g		025-02
111	土製品	土製	表土	長さ 14.5 厚さ 8.4	内周:膠部接合時の有機物痕	密	良	灰SV8/8	灰層のみ			026-01
112	土師器	杯	表土	口径 14.1	外周:オサエ・ナデ・ロクロナデ 2.9内周:ロクロナデ	密	良	にじみ・黄緑SV8/4	口縁部 1/12			016-05
113	土師器	高杯	表土	底径 10.9	外周:ハケ・面取の13箇 内周:ナデ	密	良	灰SV8/6	胴部 のみ	杯部との接合面に剥み 目		016-06
114	灰輪陶器	碗	表土	底径 6.5	外周:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 1.2内周:ロクロナデ	密	良	輪:灰白磨836 表層:にじみ・黄2.5V8/3	底部 3/12		重ね焼成痕あり	016-03
115	緑輪陶器	碗	表土	底径 7.9	外周:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 1.5内周:ロクロナデ	密	良	輪:緑色836 表層:灰白2.5V7/1	底部 1/12		縁部系	022-07
116	緑輪陶器	碗	表土	底径 6.9	外周:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 2.9内周:ロクロナデ	密	良	輪:灰色834 表層:にじみ・黄緑	底部 3/12		近江系	023-01
117	陶器	山皿	表土	口径 9.4	外周:糸切痕・高台貼付・ロクロズリ・ロ クロナデ 3.2内周:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5V7/2	口縁部 7/12		内面に漆付着	016-02
118	白磁	碗	表土	底径 5.7	外周:ケツ出し・高台・ロクロナデ 1.9内周:ロクロナデ	密	良	輪:象牙色789 表層:灰黄黄10V8/4	1/12			022-07
119	白磁	碗	表土	底径 5.7	外周:ケツ出し・高台・ロクロナデ 1.4内周:ロクロナデ	密	良	にじみ・黄緑10V8/3	底部 3/12		重ね焼成痕あり	016-04
120	土製品	土埴	表土	長さ 4.1 幅 2.6 厚さ 0.5	全面:ナデ	密	良	にじみ・黄緑10V8/3	完形	重さ3.44g		023-02
121	陶器	三足香炉	カクタン	底径 12.3	外周:糸切痕・ロクロズリ・三足高台貼 付・ナデ・内周:ロクロナデ	密	良	輪:灰竹色776 表層:灰黄2.5V8/3	底部 3/12		トタン痕あり	018-01

第Ⅱ-5表 第186次調査 遺物観察表(3)



南調査区東側全景（北から）



南調査区西側全景（北から）

写真図版 2



北調査区全景（北から）



S K 10856・10857・10858 出土状況（南から）



S K 10856 下層出土状況 (南から)



S F 10850 南側 (北から)

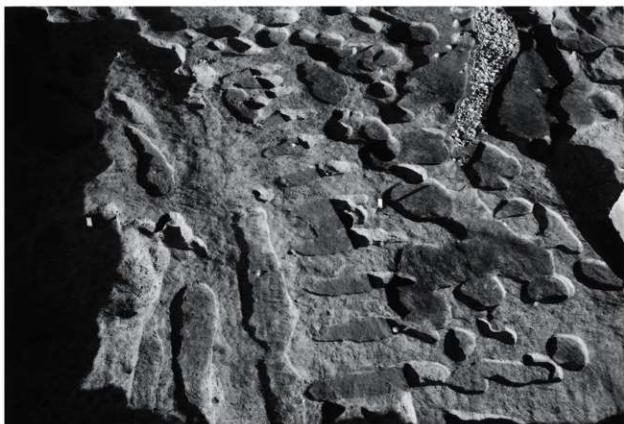
写真図版 4



S F 10850 北西側溝群 (S D 10831 ほか・北から)



S D 10830 (東から)

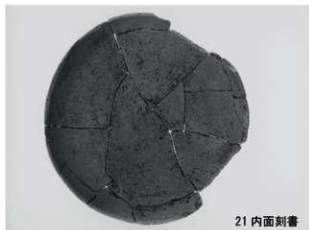


S Z 10841 (南から)



S Z 10845 (南西から)

写真図版6 出土遺物(1)





写真図版 8 出土遺物 (3)



報告書抄録

ふりがな	しせきさいくうあと へいせいにしゅうななねんどはつくつちょうさがいほう							
書名	史跡斎宮跡 平成27年度発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	宮原佑治							
編集機関	斎宮歴史博物館							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596-52-7027							
発行年月日	西暦 2017年3月24日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
斎宮跡	多気郡明和町 斎宮・竹川	24442	210	34° 31' 55" ～ 34° 32' 30"	136° 36' 16" ～ 136° 37' 37"	20151214 ～ 20160330	536m ²	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
斎宮跡 第186次	官衙	奈良後～鎌倉		掘立柱建物 柱列 道路 溝 土坑		土師器 須恵器 灰釉陶器 緑釉陶器 山茶碗 瓦器 瓦 ロクロ土師器 白磁 青磁 青白磁 志摩式製塩土器 土馬 土鍾 石製品 鉄製品		奈良時代後葉 から平安時代 初頭の道路側 溝、平安時代 末葉から鎌倉 時代の道路、 礎敷
要約	平安時代斎宮の方格地割という「下園東区画」の北西隅部から、方格地割の道路上の発掘調査である。調査区内では、奈良時代末葉に造成された方格地割の区画道路側溝やそれとほぼ同時期のドーマン状の記号が刻書された高杯、皿を中心とした多数の器種の土師器が埋納された土坑のほか、平安時代前期の土坑や掘立柱建物、平安時代末葉から鎌倉時代の道路、礎敷などを確認した。区画道路は造成初期の段階から鎌倉時代へと移り変わる中で、区画道路幅が3分の1程度までに規模を縮小していることが明らかとなった。さらに平安時代末葉から鎌倉時代には、道路交差点付近に波板状凹凸面が形成され、付近には道路あるいは周辺施設に関連する礎敷遺構の存在も確認した。							

史 跡 齋 宮 跡

平成 27 年度

発 掘 調 査 概 報

2017 年 3 月 24 日

編集・発行 齋 宮 歴 史 博 物 館

印 刷 株 式 会 社 アイ プ レ ー ン
